

恋姫†無双～DQNツ☆キ
チ○イだらけの三国志
演義～

gtu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

みんな大好きDQN四天王を恋姫世界で暴れさせてみる。

主役は関所放火魔森さんちの鬼武蔵です。

完全に思いつきの投稿です。ムシヤクシヤしてやった。反省している。処女作です。過度な期待はしないでください。

また、歴史的人物を貶めるわけではありません。

あくまでも、そうゆう逸話が有りそこから人物像を想像しているに過ぎないのでモデルのあるオリキャラ程度にとらえてください

軽い人物紹介

森 長可（もり ながよし）

織田信長の部下で織田家最強のマジ〇チ

森長可の逸話には、だいたい死人がでる

なお、弟はかなり有名な森蘭丸と津山藩初代藩主の森忠政である

水野 勝成（みずの かつなり）

徳川家康の従弟にして、DQN

長久手のあと、父親に勘当され諸国を回ったが行く先々で問題を起こしては出奔しまくった

なお、父親が死んで旧領を引き継いでからは名君となったせいでDQN四天王入りはしていない

最上 義光（もがみ よしあき）

政宗被害者の会名誉会長にしてシスコ

ありとあらゆる萌えを開拓した第一人者

まーくんに隠れがちだが、結構DQNな行動が多い

伊達 政宗（だて まさむね）

最近、米沢出身なのに仙台出身扱いにされつつある人

DQN四天王のなかでは一番有名

年取ってからはDQNからちよい悪オヤジになった

島津 家久（しまづ いえひさ）

元服当時はは忠恒（ただつね）

島津に暗君無し（暴君はいる）の暴君

どのくらい暴君かというと木刀の剣豪に自分のお気に入り剣士を真剣で立ち会わせ

て負けた腹いせに後ろから真剣で斬ろうとする位暴君

ちなみに妖怪首おいてけの従弟

細川 忠興（ほそかわ ただおき）

ヤンデレサイコの元祖

嫁を見た奴はとりあえず斬る

なお、嫁の死後も生きてるので、メンヘラでは無い模様

文章が気に入らないところがあるので所々編集します

13 話以降は削除して新しくしますのでお待ちください

目次

プロローグ 1

第2話 5

第3話 9

第4話 18

第5話 25

閑話 鮭様奮闘記 31

第7話 39

第8話 45

第9話 50

第10話 55

第11話 61

第12話 66

第13話 70

第14話 77

第15話 90

鮭様奮闘記 第2章 鮭がために俺は殺

る 105

プロローグ

1584年尾張国長久手

徳川、羽柴両軍が激突していた

羽柴軍は、羽黒の戦いでの森長可の独断専行による敗戦により劣勢にたたされ、劣勢を覆す為に、中入り（がら空きである敵国に奇襲をかける作戦）を決行していた。

しかし、徳川軍はそれを看破し、中入りの決行部隊に逆に奇襲を仕掛けた。

これにより、決行部隊であった羽柴秀次、堀秀政、池田恒興、池田元助、そして、森長可らが窮地にたたされていた

「くそッ！、徳川め！小賢しいぞ、くそがッ！」

森長可は、徳川家家臣である井伊直政の策により沼に足をとられた。

普段の長可であればこのような策に引つ掛かるはずはなかった。

これでも長可は、1582年の甲州征伐の高遠城三の丸攻めで非戦鬪員である女子供ごと兵士たちを撃ち殺す功績を上げて、織田家の若手のなかでは最大である信濃川中島等20万石をもらい上杉への牽制を一任されたり、また、本能寺の変後、自分を暗殺し

ようとしているという木曾義昌にたいして、「明日城に行くよ、」と言っておきながらその日の夜に「来ちゃった、」とばかりに来て城門が開いてないという理由で攻城兵器を使つて城門を破壊して城に入り、木曾義昌の息子を養子にすると言ひ出し、ていの良い人質にして、自分の本領に戻るまで連れ去り、本領に帰つたとたん、「やつぱり養子はいらね」といつて木曾義昌の息子を追い返したりと人間性はともかく暗殺を見抜けるほど頭も切れ、牽制を一任されるほどの優秀な武将であつた。

だが、時期が悪かつた

羽黒の戦いは、森長可にとつて見れば初めての敗戦だつた。

常勝であつた最盛期の織田家において、本人もその強さが当然のものだと思つていた。

しかし、結果は、一時後退という伝令が一時撤退となり、最終的には、全軍撤退という伝令として伝わつた。

伝言ゲームでのミスのような話だが、それにより、森軍は全軍撤退となつた。

余談だが、羽黒の戦い後に同僚であつた蒲生氏郷に対して、あいさつが聞こえないといつて喧嘩を吹っ掛けている。

完全に八つ当たりである。

この喧嘩はヤンデレサイコキチこと細川忠興に仲裁された。

ヤンデレは嫁のこと以外では比較的まともである。

閑話休題

そのようなこともあり、冷静さが欠けていた森長可は中入りという成功例が片手の指で数えられるほどしかない作戦に名乗り出た。

本来であれば止める役目であつた筆頭家老かがみんなこと各務元正は留守番であつた。どうか森家の中心人物のほとんどを小牧長久手の戦いに連れていつてないのである。

そんなこともあり暴走を止める人物もおらず、長久手でまんまと井伊直政の挑発に乗り沼地に嵌まり現在に至るのであつた。

「くそッ、井伊も徳川も全員ぶつ殺してやる！それで禿げ鼠から甲斐をとつてや」

バンッ・・・・・・・・・・

銃声が響いた

そして銃声のあとには、無惨にも眉間に穴が空けた森長可が残されていた。

森長可 長久手の戦いで討死

享年27才

第2話

「……………んっ」

長可が目を覚ますとそこは先ほどまでの沼地ではなく、森の中であつた。

「なんだ？徳川に捕虜にでもされたか？」

しかしその眩きもすぐに違うというのがわかる。捕虜ならば当然手足を縛るだろうし、見張りもおらず、何より長可の横には長年愛用している槍「人間無骨」が無造作に置かれていたからである。

「ヒツヒツヒツ兄ちゃんなかなか良いもの持つてるじゃないk
ザシユ……………」

髭の男の身体が真つ二つになる

「なっ！アニk

ドシュ……

身体の小さな男の背中から槍が生える

「てツてめえ！よk

スパッ

太った大男の首が飛ぶ

「切れ味も問題無しか……本当に何処だ此処は？」

そういつて長可は出来立てホヤホヤの3つの死体に目を向ける

「こいつらなにか知ってたかもしれないが切れ味確かめたかったしまあしようがねえな……んっ!?馬が近づいてくる音がする！しかもかなりの数だ！井伊か誰かは知らねえが味方もいねえし逃げとくか」

そういつて長可は音のする方向とは逆に向かって行った

・ ・ ・ ・ ・

「……可笑しいわね」

県令である曹操はそう呟いた。

曹操は太平妖術という書物を盗まれていた。

その盗人の情報を掴み、太平妖術を奪い返すため森に兵を引き連れ向かったのである。

しかし、盗人たちは既に息絶えていた。

それだけならば、仲間同士の内輪揉めか、別の野盗に奪われてたかとおおよそ察しがつく。

だが、その死体には、争った形跡などはなく、全て一撃のもとに葬られていた。

「はあ……結局この盗人たちも太平妖術の書を持っていないということはどうもここか
に売り払われたと考えるのが自然ね……しかし3人を一撃で仕留めるほどの腕前。」

太平妖術はどうでも良いけど、この者は是非とも私の覇道に欲しいわね」

「華琳様……この辺りの搜索は終わりました！」

「そう……わかったわ春蘭まあこれだけの腕があれば、覇道を進めるうちに会うでしょ

う。フッフッフ・・・その時は敵かしら味方かしら・・・死体を見る限り少々癡狂のようだけどどちらにせよ私に屈服させて、じっくりと可愛がってあげてあげるわ」

「むうゝ華琳様！可愛がるのであれば、この春蘭を可愛がってください！」

「あら春蘭妬いてるの？フッフフ可愛いわね・・・いいわよ今夜は春蘭に相手して貰うわ」

「ああゝかりんさまゝ」

残念ながら曹操の考えは少し外れていた。

長可は男であるため、曹操の閨に参加はできないのは勿論だが、何よりもあの第六天魔王織田信長ですら、放し飼いでいたほどの狂犬である。

それは近づくだけで首と身体がグッバイする確率が常に存在するほどである。

その後曹操はこの時探し出して始末しなかったことをのちにさんざん後悔することとなる。

まあ探し出せたとして始末できたかどうかは不明だが・・・

第3話

長可は曹操の軍から逃げ出してから村に着いていた。

(結局此処がどこかわからねえな…さっき襲ってきた奴等から聞いたら”きしゆう”とかいってたが紀州？なんで長久手から紀州に？まあ徳川の領地でないだけましかな…徳川の領地だったら村焼いて略奪とかも出来ただけだな…それだけは惜しいな…最悪野盗のふりしてやればいいか)

なお、襲ってきた連中は、漏れなく、首と身体が永遠の別れをした模様

ドンツ…

そんなゲスな事を考えながら歩いていると何者かと肩が触れた

その触れた相手を見ると学生服に身を包んだ美少年と桃色の髪をした優しそうな美少女と黒髪の凛とした美少女、赤髪の元気そうな幼女がいた

「あああああ~~~~ん!!! てめえどこみて歩いてんだ!! 殺すぞ!! 糞が!!!」
自分も見えていなかったのにこの言いようである

「す、すみません!!」

少年が謝る

すると黒髪の少女が少年を庇うように出てきた

「ご主人様!! 謝る必要はございませんー…おい! 貴様! 余所見していたのはそちら

シュツ…

ガツギーン!!…

鉄と鉄が激突した音が鳴り響いた

音の中心には、人間無骨で突きを繰り返した長可とそれを防いだ黒髪の少女がいた

「貴様!!なんのつもりだ!？」

「ほう、殺れなかったか…お前俺の槍防ぐとはなかなか良い腕してるじゃねえか!!まあ殺すけどな!・ヒヤハー!!!」

「くつ、狂人が!私の手で成敗してやる!!」

「ま、待って、愛紗ちゃん!!」

先ほどまで呆気にとられていた桃色の髪をした少女が黒髪の少女を止めた

「てめえ!!邪魔だぞ!!ごらあ!!」(ちっ、周りに人が集まってきやがった…赤いガキもいっちょ前に蛇矛なんか構えてるし、これ以上騒いだら羽柴の連中にバレていちゃもんつけられるかもな…ここは引いとくか)

言葉とは裏腹に結構冷静な長可だった
「すいません!!私達の注意不足でした!!」

「桃香様が謝る必要などありません！この者は危険です!!桃香様は下がっていきなさい！」

「愛紗ちゃん！私達だつて前を見ていなかったんだからこつちにも責任はあるよ！それにこんなところで戦つてどちらかが傷付くなんてそんな悲しいことしたら駄目だよ……」

「……桃香様……わかりました……すまなかつたな……こちらの不注意だ」

「……ああ、こつちも色々あつて気が立つてたんだ……悪かつたな」

そういつて謝る長可

DQNが謝るなんて明日の天気は槍かな？それとも鉄砲かな？

「色々あつたつてなにかお困り何ですか？」

「ああ、ここが紀州つてのはわかつたんだが紀州のどの辺りかわからねえんだよ」

「ここは冀州のたく県ですよ」

「知らねえ地名だな……まあいい……とりあえず紀州から近い堺までどのくらいかかる？」

「堺ですか？……すいませんそこがどこかわからないです」

「はあ？ 堺だぞ!? バテレンとかが居るところだぞ!? 蛮人だからって自分が日本で初めて入った所の地名くらい覚えておけよ…」

「えっ！ もしかして日本人なんですか!？」

そんなやりとりをしていると今まで黙っていた少年が口を開いた

「ああ!?! 日本人に決まってるんだろ！ 俺が蛮人に見えるってか!?! 潰すぞ糞が!！」

話を途中で切られたうえ、蛮人に思われ不機嫌な長可

「ご主人様、知っていますか?！」

「ああ、もしかしたら俺と同じ所から来たのかもしれない…失礼ですが、あなたの御名前を聞かせてもらってもよろしいですか?！」

「ああ!?! 美濃国金山の森武蔵守長可だ！ 覚えておけ！ 糞ガキ!！」

「…やはり…森さん大事な話があるんですが少しその食堂で話を聞いてくれないですか?！」

(…この糞ガキなにか知ってるようだな…まあ聞くだけ聞いてみるか…)
「…まあ良いだろう…変な話だったらぶつ殺すからな」

.....

「んで、話つてのはなんだ？」

「信じられないかも知れないですがここは中国の後漢の時代で、そして、俺はあなたより未来からこの時代に来ました」

シュツ…

それを言い終わるかどうかの時点で長可は人間無骨をその少年の首元に突き立てた

「てめえ、話聞いてなかったのか!？」

俺はからかうのは好きだが、からかわれるのが三番嫌いなんだよ!! ああん!!」

ちなみに一番が一揆、二番が命令されることである

「貴様!!ご主人様に何をしている!!」

「いや…良いんだ愛紗…森さんこれを」

スツ…

少年はおもむろに携帯とiPodを差し出した

「ああん!!なんだこれ!?!…いや…本当に…なんだこれ?…なんなんだこれえ!?!」

「…とりあえずあなたより未来からこの時代に来たことはわか

バキィ……

…なにかが割れる音が鳴り響いた

長可の手のひらには無惨にも真つ二つになった携帯が残されていた豚に真珠、DQNに電子機器良いことわざである

「……………えっ?、な、なにしてるんですか!?!?!?」

「ヒヤハハハハ！バキイ…だつてよ！

おもしれえ!!…はっ、良いこと思い付いたこの小さい方のやつ燃やして見ようぜ
!!!」

そういつて長可は、iPodを持ち食堂の調理場に向かって行った

「面白そうなのだ!!長可お兄ちゃん、鈴々もやるのだ!!」

「なかなか見込みあるガキじゃねえか!よし!俺がこの小さいの焼くからお前は壊れた
方焼け!!」

「えっ、ちよ、ま、待って!!待って!!待って!!バカな高校生かあんた!!愛紗!桃香!森さ
んを止めて!!鈴々も面白くないから止めて!!早く!!」

「はっ、はい!ご主人様!!」

ヒヤハハハハハハ……イヤーヤメテ……

……こうして北郷一刀と森長可との邂逅はなつた

i P o d ? ……上手に焼けました

第4話

「んで…北郷とか言ったか…なんの話だっけ？」

iPodを焼いて満足した長可はそう言った

「…俺が未来から来たことがわかったか聞いたんですよ…」

北郷一刀は疲れたようにそう言った。

「まああれだけのもの見たらな…ところでさつきいつてた”ごかん”ってなんだ？」

「えっ？三國志は知らないんですか？見た目的に戦国時代くらいだと思ったんですが…」

「三國志？…劉備とか関羽のやつか？」

「はい！何ですか？」

「むっ？…呼んだか？」

唐突に桃色の髪の少女と黒髪の少女が発言した。

「ああ？…何いつてんだお前ら？」

「いや、さつき呼んだじゃないですか！劉備と関羽って」

桃色の髪をした少女がそう言った

「…はあ!?どういう事だよ!?北郷!!」

「…ここに居るのがその劉備と関羽って事です…すぐには信じられないでしょうが…」

「……………まああいぽっど?…だったけか?あれがあるんだし劉備が女のこともあるだろ

…」

(いい年して三國志の真似事かよ…頭おかしいなこいつら)

お前が言うなと言いたくなることを考えていると、一刀が話し出した

「…とところで森さんはここに来る前はどこにいたんですか？」

「…長久手の戦場で徳川と戦ってたんだが気づいたらここにいた」

「…長久手って…もしかして、小牧長久手の戦いのことですか!!?」(そんな歴史に残る戦

に出るなんて森さん何者だ?)

そんな事を考えていたその時、

「たつ、大変だー!!!ぞ、賊が村を襲ってきたぞー!!!」

男の大声が村中に響き渡った

「なに!?おのれ賊め!!この関雲長が打ち取ってくれる!!!」

「賊をギタンギタンにしてやるのだ」

「…仕方ないよね…みんなが笑って過ごせる世にするためだもん…愛紗ちゃん!!鈴々ちゃん!!気をつけてね!!」

「桃香…:…そうだ!森さん!!森さんはここで隠れ…:あれ?…:森さん?」

劉備達が決起しているなか長可は姿を消していた

「ふん、どうせ一目散に逃げたのでしょう」

「ご主人様…:あのような者と関わるのはあまりよろしくないかと…」

「…いや…:森さんもここに来てすぐで混乱しているだけなんだと思う…:それにもしかしたら戦の経験は愛紗達よりあるかも知れない」

「あの知性の欠片もない奴がですか?お戯れを…」

「…森さんはすごい人だよ…:一度突きを受けた愛紗なら俺より森さんのすごさわかってるんじゃない?」

「一刀が長可の事をここまで庇うのは理由がある
まず、一刀は森長可と言う人物を

知らなかったが武蔵守という長可の官位からそれなりの武将であるのではと考え、また、バテレンや長久手という言葉から戦国時代の人物であり、美濃ということで織田信長の部下だったのだろうと考えたのである

もちろん、そういった理由もあるが何よりも、突然飛ばされた異世界で時代が違うとはいえ、同郷の者に会えたと言うことが長可を庇う一番の理由であった

「…そうですね…武であれば鈴々や私と同じくらいの実力があると見てよいでしょう…しかし、問題は義を重んじているかです！」

そんななかまた、村中に大声が響き渡った

「たっ、大変だー!!! 若い者兄ちゃんが一人で賊に突っ込んだー!!!」

「なに! ご主人様! もしや森武蔵かもしれません!! 村を救うために単騎で賊に向かうとはたいした奴だ」

「そうだね…みんな急いで森さんと合流しよう!!」

そう言つて一刀達は賊に向かつていった

……

賊が来ているという村から少し離れた雑木林に来た一刀一行だが、そこに生きている賊の姿はなく、代わりに既に息絶えた賊達の亡骸が20〜30程度転がっていた

「…なんだよこれ…森さんが倒したつてことか…？」

「森さんつてやつぱり強いんだね…」

そんなことを言いながら雑木林を進んでいると男の後ろ姿がうつすらと見えてきた

「あつ！森さん！無事でしたか！よかつた！」

「森武蔵殿!!村を守るためにこれだけの賊を倒すとはな…どうやら貴殿を誤解していたようだ…」

「長可お兄ちゃんすごいのだ!!」

そう言いながら近づいていくと男は振り返った

「…森武蔵?…長可?…:…おいおいなんの冗談だ…:鬼武蔵は長久手で討ち死にしたんだろ…:ここは黄泉いか?」

そこにいたのは長可ではなく、長可よりも若い顔をし、一つ目目枯梗の紋があしらわれた綺麗な着物をきた者がいた

「というか…:身体は若返ってるし、意味わからん」

「貴様!!何者だ!?!」

そう言つて関羽は青龍偃月刀を構えた

「…:はあ…:昔に比べて温和になったもんだなあ…:俺も

…:ああ何者かだっけ?」

男は関羽を慈しむような目で見ながらにこやかに続けた

「俺は水野、備後福山10万石水野日向守勝成だ」

第5話

「これをしたのはお前か!？」

関羽が勝成に尋ねた

「ああ、こいつらが逃げてきて、道を聞こうと呼び止めたら、邪魔するなら殺すと脅されたのでついね…お主らの仲間だったか？」ニコツ

勝成は微笑みながら言った

「そんなわけないだろ!!それより貴様森武蔵殿を知っているのか!？」

ギャー…

そんな事を話していると雑木林の更に奥から悲鳴が聞こえた

「なっ、なんだ!?!今の声は!？」

一刀はその声に反応した

「…とりあえず奥の方に行ってみようよ!もしかしたら森さんが倒した賊の声かもしれない!!」

「…そうですね…なに、この関雲長賊が何人いようと遅れは取りませぬ!!」

「ふむ…よくわからんがお主に着いていった方が賢明なようだな」

(…賊を倒したということは敵ではなさそうだな)

「はい!是非来てください!」

一刀達は勝成と共に雑木林の奥に進んだ

雑木林の中心部そこには賊の大將の男を木に縛り付け手に持っている松明の火をその男の顔に押し付けている長可がいた

周囲には30体ほどの賊の死体が地面に転がっていた

「おいおい…何べん言ったらわかんだよ…ギャーじゃねえだろギャーじゃ…」

「…た、たのむ…許してくれ…」

「許す?なにいつてんだ?許すもなにも俺は怒ったりしてないぜ、むしろさつきまでの鬱憤が晴れて清々しささえ感じてるんだよ…」

「ほ、ほんとうか?...ならこの縄をほどいてくれ…頼む…」

それを聞いた長可は左手に松明を持ちかえ、木に立て掛けていた人間無骨を右手に持った

「そうだな…気もすんだし、現状も理解できたし、放してやるよ…首だけな!!」

ズシュ…

長可は右手の人間無骨でその男の胴と首を切り離れた

「…ふう…すつきりした…これで村に戻って村燃やして、略奪してもこいつらになすりつけられるな…ここで殺されたのは仲間割れに見えるだろうし…しかし三國志の時代か、確かこいつ黄巾党とかいつてたな…すると、曹操とかがまだ、県令だったころか」

普段の言動で忘れがちだが、長可は、元は土岐氏に仕えていて、八幡太郎義家の七男陸奥七郎義隆を祖とする森氏の生まれである

つまりは、次男とはいえかなり由緒正しい家のお坊ちゃんなのである

当然、幼い頃から教養や礼儀も一通り学んでいるのである（それを生かすとは言っていない）

三國志のだいたいの流れから、ある程度有名な武将程度なら教養として知っているのである

(…あの男の話が本当たとすると、さっきの桃色は劉備だったことになる…まだ無名の劉備の名を偽る必要はないしな…結構もつたいなかったかもな…まあいいやとりあえず戻って村焼こう)

松明の火を一旦消しながら考えていると、後ろから声をかけられた

「森さん！こんなところで何してるんですか!？」

「あ!?!…北郷か…わりいが用事があるんでな…後にしてくれ…」

「…用事って賊を一人で倒すことですか?…そんなの出来るわけないじゃないですか!!」

「そうですよ…森さん…こんな拷問まがいのことまでして…そんなに一人で背負わないでください…少しでいいんです…私達を頼ってください!」

「森武蔵殿…私は貴殿を勘違いしていた…しかし、貴殿の義と武は本物だ!!我々と共に賊を討ちましょう!!」

「鈴々も戦うのだー!!!」

(…はあ?なにいつてんだ?こいつら?)

長可当然の疑問である

村焼こうとしたら、いつのまにか正義の味方認定である…うむ、わからん

「お主がああ鬼武蔵殿か…なるほど…あの井伊の赤揃えが恐れるのも無理はないか」

困惑する長可に勝成は尋ねた

「ああん!!誰だ!?!てめえ!」

「水野日向守勝成と申します…以後お見知りおきを」

「…水野か…水野?…家康の生母の家だったか?…ぶつ殺す!!」

そう言つて長可は人間無骨を構えた

「落ち着け鬼武蔵殿…今は徳川だ、豊と…羽柴だ揉めている場合ではないでしょう」

人間無骨を構える長可に対して、勝成は、一切構えずそう答えた

(こいつ…なかなか厄介だな…)

長可も歴戦の将である自分と相手の力量ぐらい分かるそして、自分と同等かそれ以上の相手に真つ正面から立ち向かうほど長可は馬鹿ではない(怒っているときは除く)

「ちつ、わかつたよ…」

そう言つて長可は人間無骨を下げた

(しかし、劉備か、最終的には負けるにしても三國の一國を担っていた奴だこいつの下に
ついとけば食いつばぐれはしないだろう…途中でやばくなったら鞍替えすればいいし
か…)

「しようがねえ…てめえらの下についてやるよ!!…ありがたく思いやがれ!!」

「俺も現状がわからぬのでな…お主らと共に行こう」

「はい！ありがとうございます！！」

こうして長可と勝成は一刀達と共に行動することになった

閑話 鮭様奮闘記

やあ、初めまして！私の名は最上義光だよ！「よしみつ」でも「よしてる」でもなくこれで「よしあき」って読むんだ！よろしくね！

ところで今何しているのかというとな蛮人みたいな綺麗な金髪の女の子の兵に連行されているんだ！

何でそんな事になったかって？

それはね、私の隣にいる頭のおかしい眼帯糞野郎のせいだよ！ほんと疫病神だね！

まったく、何でこんなのが甥っ子なのかね？不思議でならないよ！絶対に輝宗の方の血を色濃く継いだんだね！やっぱ伊達つてのはろくなのがないね！

私の妹の義の子なんだけど義はとっても美人でそれでいて、可愛さもあり、容姿端麗、佳人薄命つて言葉は義が具現化しているんだ！それでいて義はその美しさにおごらず、誰にでも優しく、いつもこの眼帯糞野郎のことや私のことを気にかけてくれたんだ！本当に日本一いや世界一の美女だよ！

…だから、義を伊達に売った父上は無理矢理隠居させたんだけど…まあ、しょうがな

いね!

あつと、話がそれたね! ごめんね! とりあえず義は絶世の美女つてことと信じられな
いだろうけど、この糞野郎の母親つてことは覚えてね!

それでなぜ金髪の子に連れていかれているかつて言うかね…この眼帯糞野郎…政宗
がこの金髪の子を怒らせたんだ!

何が、「ガキ、頭に変なのがついてるぞ」だよ! 良くある子どものずれたおめかしだよ
! 察してやれよ!

そう小声で言うとその女の子も更に怒りだすし、きつと政宗の態度が駄目だったんだ
な…まったく、政宗は女心と言うやつがわかってないんだよ!

あつと、なんか城壁が見えてきたよ! とりあえず、この金髪の子に話を聞いてもらおう!
う!

うーん何て言つたらいいだろう?

謁見の間みたいなどころに連れていかれたんだけどさ…

とりあえずここは日の本じゃないみたいだ! ごかん、つて国らしい! 政宗がそう

いつてた!

政宗が驚いた顔してたけど知ってる国なのかな? 唐入りのときにでも寄ったのかな? となると、朝鮮の近くの国なのかな?

それで金髪の子が、そうもうとく、ちゃんって言うんだって! 変わった名前だね!

その名前を聞いたとき、政宗が更に驚いて「はあ? 頭の中までおかしいのか?」とか言っただ!

女の子になんて口聞いているんだろうね! さすがの私もそれには怒ったんだ!

すると政宗は信じられない物を見る目で私を見て「伯父上: まじか: ?」とか聞いてきたんだ! なんの事だ? って聞いたらため息をついて「もういい:」だってさ! 相変わらず失礼な奴だよ!

そして、後から来た綺麗なお姉さん2人は、かこんげんじよう、さんと、かこんみようさい、さんだって! 姉妹らしい! げんじようさんの方は、さつきも見かけたね!

外国は、変な名前の人が多いんだね! 文化の違いって奴だね! ちなみに、政宗はまた、驚いていた: 本当に落ち着きがないね! きつと父親に似たんだね!

私みたいな明鏡止水の心を持たなきや大名なんてやってられないのにね! これだから伊達って奴は」(ハ、ハ、ハ)「ヤレヤレ

ところで、さつきから華琳とか春蘭とかいつてたけどそれはなんなの? って聞いた

ら、いきなりげんじょうさんが剣を振ってきたから、それを愛用の指揮棒でとつさに防いでんだ！危ないな！まったくもう！手が痺れちゃったよ

そしたら、もうとく、ちゃんがげんじょうさんを止めてくれたよ！

そして、真名について教えてくれたよ！何でも真名って言う大切な名前で勝手によんだら殺されても文句は言えないらしい（・ω・）

それを聞いてすぐに謝ったよ！

”もうとく、ちゃんはすぐに許してくれて、納得していなかった、げんじょう”さんも説得してくれたよ！やっぱりいい子だね！政宗にも見習ってほしいよ！……そういえば駒も、もうとく、ちゃんくらいの年だったな……

……話がそれたね！それで、もうとく、ちゃんがここで客將をしないかって誘ってくれたんだ！

とりあえず、行く当てもないしお世話になる事にしたんだ！政宗は何かほざいてたけどそんなのは知らん！

後、もうとくちゃんの真名も教えてもらったよ！華琳ちゃんだってさ！可愛らしいね

!

”もうとく”ちゃん改め華琳ちゃんの期待に応えられるように頑張つて働くぞ(´・ω・´) キリッ

……

…義光と政宗を捕らえたのは偶然だった

太平妖術の書を探し終えて県令をしている頓丘に帰還する途中に30代くらいのは尺はある図体のでかい男と10代後半くらいの右目が眼帯の小柄な少年が言い争いながら歩いているのが見えたから賊を殺した犯人を見てないか話をきいたのよ

それが義光と政宗だった

しかし、声をかけていきなり政宗にガキ呼ばわりさせるとは思わなかったわ…しかも

私の髪を変なのって言った……しかし、この程度では、私もそこまで怒りはしなかったわ……義光が小声で子どものずれたおめかしと言ったのが聞こえるまでわね……

私は即座に2人を捕らえて頓丘に帰還したわ

もちろん2人を殺す気なんてさらさらなかったわ……私が誰なのかを教えて、慌てるどころをからかつてやろうというちよつとした遊び心よ

陳留に着いてから2人を謁見の間につれていき、春蘭と秋蘭を下げたから私は2人に向き合った

そしたら、政宗がここはどこなのか聞いてきた……とりあえず頓丘だと答えたわ……政宗は後漢のか？と聞いてきたから肯定すると驚いた顔をしていたわ……異国からでも来たのかしら？

そして、私が誰なのかを明かしたわ……だけど義光は、名乗ったあとに「よろしくね！」もうとく、ちゃん！」とか言ってたし、政宗にいたっては「頭がおかしいのか」とかいつてきた……

政宗の罵倒に関しては義光が叱っていたから、まあ良いことにするわ

その後、詳しく話を聞いてみると、どうやら本当に異国から来た奴らで伯父と甥の關係というのが解ってきた

異国がどんなところなのか色々な話が聞けそうだと思つた私は春蘭と秋蘭を呼んでその国の話を聞こうとした

しかし、義光が私と春蘭の真名を呼んでしまった…私はとつさに、絶、を持ち、義光を切ろうとしたけど、国が違うのだから真名の文化も無いかもしれない事に気がつき、絶、を振るうのをやめたわ…しかし、私が止める前に春蘭は切りかかつてしまつていたしまつた…と思つたけど、義光は春蘭の一撃を…私の軍最強の猛将の一撃を片手で防いだ!

これには、政宗と義光以外全員が驚いたわ!…そして、もう一度切りかかろうとする春蘭を止めて、真名と言う文化を教えてあげた…すると、すぐに私と春蘭に謝罪した…どうやら礼儀の知らない野蛮人ではないようね…春蘭は、納得してないようだったから私が強く言うのと渋々引き下がってくれたわ…

しかし、春蘭の一撃を軽く止めるような人材を野放しにしておくほど私は無能ではないわ!

政宗の方も話をする限り知の方はなかなか有りそうだし、2人に客将になつてみないか提案してみた…

義光は、二つ返事で了承してくれただけど政宗は、金のことや待遇についてを詳しく聞いてきたそれに答えると政宗も悩みながらも了承してくれた

そして、2人に私の真名を授けたわ…理由は政宗はともかく、義光の方は、信用出来る人物だと感じたからかしら？

そういえば、私が春蘭を止めたとき、悲しそうな顔をしていたわ…なんだったのかしら…？

まあ役に立ちそうな2人を手に入れられたし、あの死体の犯人は手に入らなかったけど一応満足ね…もしかしたら、2人が犯人かもしれないけど…

第7話

「…とりあえず、森さんと水野さんに改めて自己紹介をしていこう！」

村に戻り、食堂に着いてから劉備がそう切り出した

「まずは、私から姓は劉、名は備、字は玄德、真名は桃香です！森さん！水野さん！よろしく願います！」

桃香がそう言うのと関羽が驚いた顔して、桃香に言った

「と、桃香様！いきなり真名を授けるのは森武蔵殿は兎も角としてさすがに…」

「愛紗ちゃん！森さんも水野さんも仲間何だから真名を隠してもしょうがないよ！…だからほら！愛紗ちゃんも！」

桃香は関羽の後ろから両手で背中をポンと押した

「わ、わかりました…私は姓は関、名は羽、字は雲長、真名が愛紗です！森武蔵殿！水野殿！よろしく頼みます！」

「鈴々は張飛翼徳なのだ！真名は鈴々なのだ！お兄ちゃん達よろしくなのだ！次はお兄

ちゃん達の番なのだ！」

「ああん!!一度言ったのに二度も言う必要ねえだろうが!!つーかなんだよ、まな、つて!!?自分達が知っている事が相手も知っていると認めてんじやねえよ!!糞が!!」

長可にしては、珍しく正論である

「あつーそつか!ご主人様と同じ所から来たのなら知らないよね!ごめんなさい!真名って言うのは心を許した人だけが呼べる名のことと勝手に真名で呼ぶと殺されても文句は言えない神聖な名のことだから勝手に私達以外の真名を勝手に呼んだら駄目ですよー!」

(やっぱり口が悪いなく森さんは…でも自己紹介を二度もしないなんて、照れ屋なところもあるんだなあ)

桃香達は長可のことを口の悪く照れ屋だけど正義感の強い人だと思っているようだ

これまでの行動をみて何故そうなるのだろうか?

長可はそんなかわいい物ではないむしろ、口も性格も何もかも悪い人であり、正義感に至っては、なにそれ?食えんの?レベルである

「ほおーう!!そいつは良いことを聞いたな!!真名で呼べば怒るなんてよ!!なあ!!水野!!」

「…そうだな武蔵殿…敵を誘き出すのに有効と言うわけだな…そんな弱点を堂々と晒す

なんて：真名で呼んでくれと言っていているようなものじゃないか！」

二人は冗談っぽく言った

DQNの冗談は本気だから困る

「も〜二人とも絶対に勝手に呼んだら駄目ですからね！」

「ところで、桃香殿これからのことは決まっていますので？」

勝成は話を変えた

このとき真名を呼ばないとはつきり明言してないところに勝成の狡猾さを垣間見れる

桃香も冗談だと思っているので話が変わったことに大した疑問は感じず質問に答えた

「とりあえずこれから学友の白蓮ちゃんのところに行ってみようかと思ってますよ」

「誰？その人？」

一刀は桃香に尋ねた

「幽州の北平で太守をしている公孫瓚って名前んだけど知らない？」

（ああ曹操のかませのかませか）

長可と勝成は同じことを思った

「でもそんな偉い人に会えるのか？普通に言ったら門番に門前払いされると思うけど」

一刀は何気なく聞いた

「…大丈夫だよ！白蓮ちゃんの学友ですっていえばきつと通して貰えるよ…たぶん」

桃香は自信無さげに答えた

「いや、たぶん学友だけでは駄目だと思う…もつとこう…分かりやすく入れて貰える…
そう！例えば黄巾党討伐の義勇軍とか！」

（えっ？門番とか何か言ったら殺せばいいじゃん）

長可と勝成またしても同じことを思った

きつと思考回路が同じなのだろう

違うのは表面上まともか表面上もDQNかの違いである

「うーん…でも義勇軍を作るお金なんてないんだよね…」

「それなら俺に任せてよ！」

一刀はそう言うど学生カバンの中に入れていたボールペンを取り出した

「何ですか？その棒は？」

「これは、ボールペンと言ってなにかを書くときに便利な物なんだけど、そうだな…俺の
手を見てよ」

そう言うど一刀はボールペンを手の甲に書き出した

するとボールペンの動きに合わせて、一刀の手の甲には、よくインクがあるかを調べ

るときに書く渦巻き状の模様が浮き出てきた

「おお！凄いな！ご主人様！あつ…でも…それを売ったとしても軍を作るまでのお金にはならないと思うな…」

「軍なんて作る必要ないだろ」

長可が話に割り込んできた

「適当にその辺の体格いいやつ雇ってそいつらで義勇軍つー感じにすりゃいいだろ」
（まあ半日で返すつもりはねえけどな…脅して戦まで連れてくれば肉の壁くらいにはなるだろ…）

「俺も森武蔵殿の意見に賛成です」（戦にまで連れていければ、全員死ぬか逃げるだろうし前金だけで済むな…もし生きてて逃げないならこつそり殺せばいいか…）

長可の意見に勝成も同調した

ここのまでだと逆に清々しい

「…俺も森さんと同じことを考えていた…どうかな桃香？」

「うん！それで良いと思うよ！ご主人様！…白蓮を騙す形になるのはちよつと嫌だけど…仕方ないよね…白蓮ちゃんなら笑って許してくれそうだし」

ちよつと長可と勝成の影響を受けた桃香であった

「それでは早速私が金持ちの好事家達にそのぼうるペン？を売ってきましょう」

そうして一刀一行は好事家達にボールペンを売り、北平に向かっていった
なお、途中襲ってきた賊達は皆勝成と長可のストレス発散の犠牲になった模様

第8話

「はあ……どこかにいい文官がいないかな……」

公孫賛は太守の執務室でふと呟いた

公孫賛は北平の太守として異民族達からの防衛を任されている優秀な将である

しかし、公孫賛のもとに優秀な文官が集まることはなかった

北平という不安定な情勢の土地であることと、何より、袁紹の治めるギョウウという発展した都市が近くにあったため、基本的に優秀な人材は皆ギョウウのほうに行ってしまう。そして、北平に来るような文官はそのほとんどがギョウウでは出世が出来なかったものであり、都会では通用しなかった出戻り野郎達が田舎なら通用するだろうという甘い考えで来るのである

それでも使える奴は使えるのだが、使える奴は後々、袁紹や有力で安全な土地の太守達に引き抜かれる

その土地に思い入れがあるかあるいは、主君に本当に忠誠を誓っている文官でない限

り、出来れば皆安全なところで仕事をしたいのだ

その気持ちも公孫贇自身もわかっており、また、下手に処罰を加えると今度は本当に文官が寄り付かなくなるため、基本的に引き抜かれることを許さざるを得ない状態なのだ

だが、武官のほうは白馬義従という主に烏桓族で構成された強力な騎馬隊もあり、また防衛を任されるだけあり、一般の兵の練度も高く、当時の群雄のなかでは、頭一つ抜きん出た存在だった

(…何で人材が集まらないのだろうか…私に人望がないからか…)

公孫贇がそう考えていたとき何者かが執務室の扉を叩いた

「…入れ」

公孫贇がそう言うと失礼しますと言う声が聞こえ、扉が開いた

どうやら、門番をしていた兵のようだ

「…なにようだ？」

「はっ！ 申し上げます！ 門前に黄巾党討伐の義勇軍を1000人ほど率いている劉備と名乗るものが太守様にお目通りを願っておりますが、いかがいたしましたでしょうか？」

「なに!? 劉備だど!? …わかった謁見の間に通せ」

「はっ！ 了解しました！」

.....

「桃香！久しぶりだな！元気だったか！」

公孫贇は久しぶりにあった親友を前に嬉しそうに出迎えた

「うん！白蓮ちゃんも元気そうで何よりだよ！」

桃香もそれに、嬉しそうに返した

親友との挨拶も終わり、公孫贇は早速本題を切り出した

「…それで？さつき義勇軍100人とか行ってたけど本当は何人なんだ？」

「あはは…バレちゃった…実は後ろの5人だけなんだ…」

「…そ、それはいろいろと予想外だな…うん？5人？後ろには3人しかいないが」

「えっ？」

桃香が後ろを振り向くと居たのは愛紗と鈴々と一刀だけであった

「…あれ？森さんと水野さんは？」

その問いに、鈴々が答えた

「お兄ちゃん達は義勇軍の振りをしてくれた人達を送っていくついでに手伝ってくれたお礼にいくつて言つてたのだ！」

「そつか！もう…一言言つてくれればいいのに…後でちゃんと紹介するけど、今いないのは、森さんと水野さんと言つて2人共、とつても強くていい人なんだよ！」

「ほう！桃香が言うんだかなりの腕前なんだろう！早く会つてみたいものだな…それで？そこにいる3人は誰なんだ？」

「うん！まずはご主人様なだけど…」

そうして、桃香が3人を紹介している頃、お礼（意味深）に行つたい人達（笑）は公孫贖の城市から離れた街道を歩いてた

そして、偽の義勇軍を募つた街の目の前に着いた勝成はその足を止め、後ろを振り返りにこやか言つた

「…はい、ここから先一步でも進んだら殺すからそのつもりで」ニコツ

ザワザワ……………

勝成の言葉に義勇軍達は困惑した

「はあ？あんななにいっつ……」

ドシュ……………!!

勝成の言葉に反応し、前に出た男は、勝成の刀に串刺しになったそして、思考停止している義勇軍に勝成は静かにそして力強く言った

「騒ぐなよ……騒いだら全員殺しててめえらの家族にもお礼してやるからな……!」

「……………!!」

義勇軍全員が戦慄を覚え、沈黙した

「よし……ではこれから来た道を引き返すぞ……もし途中で逃げたしたりしたら……………分かってるな？」ニコッ

勝成はまたしてもにこやかにそう言った

「ヒヤヒヤヒヤ!!……なかなか面白いことするじゃねえか水野!!お前気に入ったぜ!!手伝ってやるよ!!」

「ハツハツハ……そう言って戴くと有難い森武蔵殿……では、貴殿は後ろで連中が逃げ出さないか見張っていてください」

「あいよ……任せとけ!!」

そうして、勝成と長可は義勇軍を連れて公孫贄のいる城市に戻って行った

第9話

「あれ？水野さん？何でその人達連れてきたの？」

桃香は偽の義勇軍を率いてきた勝成に言った

「桃香殿…実は…この連中に桃香殿の理想と目的をこの者達に話したところ、是非とも桃香殿の力になりたいと言い出しまして…私は危険だからやめたほうが身のためだと説得したのですが、どうにも聞き分けのない連中のようにしてね…桃香殿!!この水野勝成が御願いたします!!この者達を旗下に加えることをお許しいただきたい!!」

こいつはいつたいい何を言っているんだ

義勇軍の兵達は思った

「水野さん…お願いするのは私達のほうです！皆さん力を貸してください！お願いします！」

「ああ…もちろんですとも…なあ、皆の衆!!」

「……………」

勝成の呼び掛けに義勇軍はなにも答えなかった

脅されて無理矢理連れてこられた義勇軍のせめてもの抵抗である

「なあ、皆の衆……」スウ……

勝成は刀に手をかけてもう一度言った

「……………お、おうー!!!」

今度の呼び掛けには全員が答えた

これが劉備の言ういい人である

これでいい人ならきつと世界中聖人だらけなんだろうな

「…皆さん…本当にありがとうございます!!」

「ふーん、あんたらが森と水野か…桃香の言う通りの奴らみたいだな」

公孫賛が独り言のように呟いた

「あああん!!?てめえ誰だよ!!」

長可が公孫賛に向かって言った

「ああ、すまない私は公孫伯珪だ

この北平で太守をしている…2人とも話に聞いていた通りだな」

「おっと、これは失礼した…私は水野勝成と申すものです」

勝成の挨拶が終わると皆の視線は長可に注がれた

「…ほら、森さんも挨拶しなよ!」ポンツ

桃香が長可の肩を軽く叩いた

「ちっ、森長可だ…」

長可は桃香と雰囲気に負け、名乗った

DQNの肩を叩けるなんて劉備さんまじパネエっす

「…よし…これで自己紹介も済んだことだし、これからについて話をしようよ!」

桃香がそう言うのと同時に謁見の間の扉が勢いよく開き

青い髪をし、白を基調とした露出の多い服を着た美女が入ってきた

「おやおや、伯珪殿…私を除け者とはひどいですな」

「…お前が勝手にどこか行っていたからだろう趙雲…」

趙雲と呼ばれた美女は、あっけらかんとしなから言った

「おっと、それは失礼した…ところでこちらの御仁達は何者ですかな?」

「ああ、私の友人の劉備と劉備の仲間達だ」

「ふむ、そうでしたか…それでは私も後れ馳せながら挨拶させていただこう…私は名を

趙子龍と申します現在伯珪殿の元で客将をさせていただいております」

趙雲が名乗ると同時に謁見の間の扉が勢いよく叩かれた

「入れ…どうした?何があつた?」

入ってきたのは先程の門番の兵だった

しかし、先程とは違い、顔面蒼白で肩で息をしながら叫ぶように言った

「申し上げます!! 黄巾党が北平にも出現したとのこと!! すでに死人が一名この城市にて出ているそうです!!」

「……なんと嘆かわしい」

勝成は皆に聞こえるように呟いた

明らかにこいつが犯人である

「……私の民に刃を向けるとは……許せん! 桃香! すまないがこれから黄巾党を討伐する! この城で待っていてくれ!」

「白蓮ちゃん……私達も連れていってくれないかな……?」

「……駄目だ……桃香……危険すぎる」

「そんなことないよ! 愛紗ちゃん達は私より強いし、頭だつていいんだよ!」

「……桃香……そう言うことじゃないんだ……戦では、武力や知力だけではないそれを活かすには経験のある指揮官が必要なんだ……お前達にはいないだろ」

「……白蓮ちゃん……つ、そうだ! 森さん! 水野さん! 戦で軍を率いた経験つてありますよね!」

桃香はさすがのように長可と水野に言った

「ええ、もちろん…森殿に至っては鬼武蔵と周囲から恐れたほどの武将ですよ」ニコツ
「お願いします！兵を率いてください！」

桃香は勝成と長可に懇願した

「ヒヤハハハハ!!!もう一度戦ができるなんてなあ!!!いいぜ!!!やってやるよ!!!」

「もちろんですとも私は桃香殿の旗下ですからね」ニヤリ

「これなら、大丈夫だよね！白蓮ちゃん！」

「…桃香には、戦何て見て欲しくなかつたんだけどな…まったく、言い出したら聞かないんだからな桃香は…よし！それじゃ一緒に賊を倒そう！桃香！」

「ありがとう！白蓮ちゃん！」

こうして、公孫贊とともに桃香達は黄巾党討伐へと向かった

第10話

幽州は北平にて黄巾党20000が決起

それに合わせて北平太守である公孫贊は30000を率いて黄巾党と山地で両者のにらみ合いが続いていた

公孫贊から借りた5000の正規兵と義勇軍1000を率いた桃香達は現在公孫贊や趙雲と軍議を重ねていた

軍議の結果、劉備軍は右翼に趙雲は左翼に布陣することとなり、また、劉備軍は、勝成が総指揮を担当することになった

軍議も終わり、夜も更けてきたころ勝成は桃香達に長可に相談があると言つて陣から少し離れた所にある林にいた

長可は木の切り株に腰を掛け、勝成は長可に向かい合いながら地べたに座り、勝成が話だした

「…相手方は農民が多いようですね…」

「…ああ…つーかどうすんだ？」

あの義勇軍…肉壁にするにしても数が多すぎて下手すりやそのまま敗走することに

なんぞ」

長可は頬杖をつき、めんどくさそうに言った

「ええ、ですので貴殿に頼みたい儀がございまして…」

「ああ…？何をだよ言ってみろ」

「…義勇軍を率いて後方に待機していただきたい」

その言葉に長可は勢いよく立ち上がった

「あああん!!?てめえなんでんな…!」

ふと長可は何かに気づいたように後方に陣取っている本陣の方に目をやった

「……つち、わかったよてめえの言う通りにしてやるよ…だが、ありえんのか?」

「ええ、しますよ相手方は…何せ農民反乱ですから」

「つーか連中がやってくるとして、てめえのほうはいいのかよ」

「ええ、むしろ義勇軍と正規軍と一緒にしておく方がまずいでしょう…まあ明日の本陣

付近は間違えなく激戦になりますよ」ニコッ

「はん、そいつはいいな!!明日が楽しみで眠れねえかもな!!」

「はは、それでは私が子守唄でも歌って差し上げますかな」

「ヒヤハハハハ!…んじゃ、黄巾党の連中に歌ってやんな!!なんせ永遠の眠りにつくん

だからな!」

「クフフ、そうですね…では、陣に戻るとしますか」

そう言うと二人は立ち上がり、陣に向かって歩きだした

—翌日—

前日の相談で決めていた通りに長可は行動していた

公孫賛達には、義勇軍と言うことで実戦に乏しく、今のままでは足手まといにしかないと説明して本陣から少し離れた後方に自分達の陣を敷いた

そう行動してうちに銅鑼の音が響き渡った

どうやら中央の前線で黄巾党が突撃を敢行してきたようだ

黄巾党の突撃により、右翼に布陣する桃香達500と左翼に布陣した趙雲500も黄巾党に攻撃を開始した

「……………おかしい」

趙雲は黄巾党の兵を相手にしながら呟いた

明らかに右翼に兵が少ないのである

伏兵の可能性も考慮したが、山地の開けた場所であり、10人隠れられる場所すら視界に入る分にはないため、その可能性はすぐに消し去った

「…ふむ、黄巾党も所詮は烏合の衆ということか…」

趙雲がそのよう考えていると本陣から伝令がきた

趙雲はもう戦が終わったのかと呆れたがその伝令の内容は趙雲の予想とは掛け離れたものだった

「伝令!!黄巾党の攻勢により、中央の前線が崩壊!!!至急本陣への救援を!!!」

趙雲が伝令を受け取るとほぼ同時期に桃香達の陣にもこの事が届けられていた

「くっ…まさか中央に集中しているとは…桃香様!ご主人様!すぐに本陣への救援を致しますよう!」ドントッ

伝令を聞いた愛紗は目の前の円卓を叩いて言った

「ああ！もちろんだ！早く行かないと森さん達が危険だ！」

「いえ、その必要は無いでしょう…包围を完成させるべきかと」

焦る一刀に勝成は言った

「そんな！森さんや公孫贄を見棄てるってことですか!？」

「…いえ、黄巾党がこう動くのは予想通りですよ…だから森殿を後方に置いたんですよ」

「予想!?!わかっていたのならなぜ言わなかったんだよ!?!」

一刀は勝成の言葉に食って掛かった

「言えば反対したでしょう…それに、森殿なら心配する必要も無いですよ…一揆なら誰よりも詳しいでしょうからね…」

「それでも、救援要請が来てる以上は助けに行くべきです!！」

愛紗は勝成の言葉に反論した

「ですから…あの鬼武蔵が農兵ごときに討ち取られるなんてあり得ませんよ…!！」

勝成は少しイラついた様子で反論に答えた

「…なんでそんなに森さんのことを水野さんは知ってるんですか?！」

冷静さを取り戻した一刀は勝成の長可への信頼感にどことなく、疑問を感じていた
長可の勝成を見たときの反応からして、知り合いというわけでもなさそうである

「……当然でしょう…私は自分の名と討ち取った相手の武功だけなら終生忘れない自信

があるのでね……！」ニコッ

「……えっ？」

「クフフ、冗談ですよ、冗談……ところで早く決めた方が良いのでは？無駄な救援に行くべきか？それとも包囲殲滅を急ぐか」ニココリ

絶対に冗談じゃないと一刀達は思った

「いや、えーと、その……包囲しましょう……いいよね皆……？」

「……は、はい」

「了解しました……では、包囲に動くとしましょう……もつとも、その必要すら無いかも知れないですが……」

こうして、劉備軍は黄巾党の包囲に動き出した

第11話

「くつ、まさかここまで賊の統率が行き届いているとは……」

公孫贇は黄巾党の突撃を受け、その対応に迫られていた

右翼及び左翼には救援要請をだし、崩壊した前線の建て直しをはかるべく前線から退いてきた軍を吸収して再編成を行い、いずれ本陣まで来る賊を迎え撃とうとしていた

しかし、状況は困難を極めていた

まず、救援要請は、伝達されて本陣に到着までにかなりの時間が必要となる

軍の吸収に至っては、前線から退いてきた兵は皆命からがら逃げてきた兵であり、集団で退いてきた者はほぼおらず、少人数ずつしか軍の再編成が出来ない

さらに、戦から逃げ出した兵も多少おり、戦況は公孫贇が圧倒的に不利であった

(……こうなったら後退して体勢を立て直すべきか……?)

「……………そろそろか……」

公孫贇が後退するべきかを考えているなか、本陣の軍議机に腰掛けながら腕を前で組

み偉そうにふんぞり返っていた長可がぼつりと呟いた

「なんだ？ なにか策でもあるのか？」

長可の呟きは公孫贄の耳に入った

「……いや……なんでもねえよ……」

そう言うのと長可は机からゆつくりと腰を上げ、立て掛けていた人間無骨を手に取り、浮き足立っている兵達に立ち塞がる形で向かい合った

「……おい!! てめえら!! 賊どもに突っ込んで皆殺しにすんぞ!! ぐら!!」

長可は戦場に響き渡るような大声で言った

「……………シーン」

しかし、その反応は皆無だった

「ああん!!? はいか、了解か、わかりましたも言えねえのか!!」

「……………いい加減にしろよ……」

「ああん!!?」

長可の言葉に公孫贄の配下の将が呟いた

「……………いい加減にしろよって言ったんだよ!! 前線が崩壊したんだ!! 一旦立て直す為に後退して体勢を立て直して機を待つべきだ!」

「後退してなに待ってんだ!!? 相手が調子こいでバカみてえに突っ込んで来てる今が機

だろうが!!!殺すぞ糞が!!!」ガバツ

長可は反論してきた将の胸ぐらを掴んだ

「落ち着け!!森!!こいつの言うとおりで!一度下がって桃香と星が来るまで防御を固めるべきだと私も思うぞ!」

公孫賛は長可と兵の間に入り長可を諫めた

「ああん!!おめえもバカなのか!!?引いたら連中を勢いに乗らせるだけだろうが!!!敵は質でも数でも劣ってんだぞ!!」

「……確かに……だが、勢いを殺すには、援軍を見せたほうが効果的なのではないか?」

公孫賛は長可の意見に反論した

その反論に長可は怒気を弱め、嗜めるように公孫賛の反論に答えた

「……なの意味ねえーよ……農民が反乱を起こす理由知ってつか……1つは貧困、もう1つが求人力のある指導者が反乱を起こそうとしたときだ……1つ目は減税でもすりや収まるが2つ目が厄介だ……なんせ信仰つー名の洗脳されて死の恐怖すら忘れてんだからな……教祖の為なら命をドブに捨てれる……連中は文字通り死すら恐れぬ無敵の軍団ってわけだよ……糞カスどもが」

長可の発言に公孫賛は疑問を抱いた

「……随分とこの反乱に詳しいようだが?」(まさか敵の間者か?)

「別に……経験が豊富で鬱陶しいってだけだ……ああ……あと親父と兄貴が一揆勢に殺されたってこともあるか……まあ、今じゃ家も継げて好き勝手出来るし、一揆様々って感じだけどな！ヒヤハハハ!!」

「……………すまない」

公孫贄は自分が疑ったことで長可の心の傷を抉ってしまい、さらに長可に自虐的な言葉まで言わせてしまったと思い、謝罪したが…

(……………なに謝ってんだ?)

このDQNは心に傷など存在しないし、自虐に聞こえた言葉も本心からの一言でしかない

「……まあ、様々だが気に入らねえ連中だつーのは変わんねえがな……俺は逆らうのは好きなんだが、逆らわれるのは、大嫌いなんだよ!」

「……そうか……強いのだな……」

公孫贄は長可の言葉に反乱に対する怒りはあれど復讐などではないと感じた

また、これ以上話を続けるのは失礼だと思い、別の話に切り替えることにした

「……しかし、そんな結束力の強い連中を倒すことが出来るのか?」

「んなのちよれーよ……忘れてんならまた覚えさせればいいんだよ……二度と忘れられない恐怖を植え付けてややあ逆らう気すら起きないだろ……」

「なにするつもりだ？」

「まあ、見てろよ…連中の勝ち誇った面…一瞬で青く染め上げてやるよ!!!この鬼武蔵様がな!!!」

公孫贇はやれやれと言った具合にため息をついた

「…はあ…わかった…反乱に関していえば、私はずぶの素人だしな…お前に任せる」

「は、見る目だけはあるじゃねえか」

こうして、長可と公孫贇は黄巾党討伐に向けて動き出した

第12話

「よしやあ！上手くいったぜ！官軍の野郎共も大したことないな！」

黄巾党を指揮する男：波才は公孫賛軍の前線崩壊を確認すると嬉しそうに握りこぶしを空に突きだした

この集中攻撃は、敵に対する奇襲であると共に波才にとつても一つのかげであつた。そもそも黄巾党の構成員がほぼ農民出身な時点で兵の質では遥かに劣り、装備に関してもボロい剣を持っているのがましな方で、ひどいのだと竹槍の奴もいた

馬も2頭しかおらず、とりあえず大将の分かりやすい証しとして、黄天當立の旗を、黄巾党軍の中でも、一番背の高い兵に背負わせ、その兵と共に馬に乗つて、その兵には常に側に居るよう命じた

そんな一か八かのかけに出るしかない状態でしつかりと軍を統率した波才は優秀な将といつていいだろう

ゆえに、波才は奇襲成功の報の後すぐに本陣への攻撃の指示を出した

このまま本陣も後退してくれば、勢いに乗じて敵の総大将を討ち取ることができ
かもしれない

という思いとこの勢いを止められると逆にこちらが不利になることを知っているた
めであった

そんな、優秀であるはずの波才がなぜこのタイミングで決起をする事になったか……そ
れは単純に民が身ぐるみを剥がされた状態で惨殺された死体を部下が見つけ、それを
葬つてやろうとしているのをたまたま、見回りをしていた公孫賛軍の兵に見つかり、そ
の部下が殺したと認識されてしまったためである

(一)のまま全て上手く行くとは思わないが、最低限本陣の敵を撤退させてから他の敵を
相手にすべきだな……まあ、もしヤバくなったら逃げよう……馬もあるしなんとかなるか
……)

そのようなことを考えていると、隣にいる背の高い兵が話しかけてきた

「大将！敵の本陣から1000ぐらいの兵が突っ込んで来ました！」

その言葉を聞くと、波才は敵軍の撤退であると予想し、歓喜した

「ああ！ならさっさとその1000の兵蹴散らしてやれ！そして全軍に伝える敵本陣は撤
退だとな！」（しかし、予備兵も常備しているとはな、さすが腐つても官軍か……ん？なん
だ？）

そうして、波才は指示を出し終え、官軍の兵力を考えていると軍の動きが鈍くなっていることに気が付いた

すると、先程の兵が慌てた様子で言った

「大将!!100に続けて、本陣からかなりの数の兵が突っ込んで来てます!!」

「なに?!逃げたんじゃなかったのか?!」

波才はこの報を聞き、まずいと思った

逃げに徹すると思っていた敵に反撃を受けたのだ

前線の兵は当然動揺するだろう

そうなれば、立て直すのに時間がかかってしまう

時間が勝負とあっていい奇襲では立て直す時間などまづない

つまり、ここで勢いを止められるだけで致命傷になる

故に、波才は最前線に向かうことを決断した

本来であれば、大将が前線に出るのは愚行以外の何物でもない

だが、前線で一緒に戦ってくれる大将を見れば少しは士気の低下を防げるであろう

士気の低下を防ぐことができれば、ある程度戦線を維持できる

元々、敗色濃厚の戦である

こうなれば、波才の頭にあるのは、最小限の犠牲で撤退することだけであった

どのように撤退するかを考えながら前線に向かっているとなにやら走ってくる足音が聞こえてきた

「ん？なんだ？」

そう言つて下を向き、瞑っていた目を開け、顔を上げた

ドシュ……!!!

顔を上げた瞬間であつた

波才の心臓には槍で突かれた穴が出来ており、その穴から血が凄まじい勢いで出てきていた

波才は薄れゆく意識の中、自分を討ち取つた相手を見た

顔付きは中性的で、背丈は一般の兵より頭一つ大きいほどであるが、眼光は鋭く、その身体は、槍を効率的に振るためのものに洗練されていた

美男子：波才の頭にはそんな感想が浮かんできた

そんな男は、顔付きからは想像できない悪魔のような笑みをしながら、下品な声で言つた

「ヒヤハー!!!…敵の大将!!…この森長可が討ち取つたぜ!!」

そういつて、その男は波才の首を槍で切り取り、その首を天高く掲げた

第13話

「いやー、やはり救援は必要ありませんでしたね…森殿…」

戦が終わり、後処理に追われる兵達を横目に幕舎に寄りかかりながら、勝成は長可に言った

「ああ!!? ったりめーだろうがよ! むしろ、救援なんぞに来てたらぶつ殺してたところだ!!」

「ハハハ…それは怖いですな…しかし、敵に策もなく特攻とは、驚きましたよ森殿」

「んなもん要るかよ…勢い殺すには、敵の大將討ちとんのが一番手っ取りばえーだろ」

長可はそんなことも分かんないのか…というバカにした態度で勝成に言った

「…ふむ、降伏を促したのも同じ理由と…ですが、降伏した敵兵達はどうするおつもりですかな?」

「なにいつてんだ? せつかく500人近く捕らえたんだ…殺すに決まってるだろ…」

「それを聞いて安心しました…」ニコ

「水野さーん!! 森さーん!! ゆっくりしないで手伝ってくださいいよー!」

長可達が話していると、忙しなく戦後処理に勤んでいる兵の中から桃香が長可と勝

成に声をかけた

「ええすぐに行きますよ…では、森殿、楽しみにしておりますよ」ニッコリ

そう言うと、勝成は長可との話を打ちきり、桃香と2、3言葉を交わすと一刀達があせくせ後処理をしているであろう本陣の方に歩いて行った

桃香はそんな勝成を見送ると、長可が寄りかかっている兵舎に向かっけいき、長可の隣に座り込んだ

「手伝えつった本人はやんねえのかよ…」

長可は呆れたように言った

「…あはは、疲れたからちよつと休憩ですよーと」

そう言うと、桃香は長可のことをジツと見つめる

戦のときに勝成が言っていた長可を討ち取ったという言葉が桃香は気になっており、長可からなにか情報聞き出そうとしていた

「……………」

しかし、素直に森さんは水野さんに殺されたんですか？など聞けるはずもない

故に、桃香は言葉を慎重にえらんでいた

「……………んだよ!!! ああん!!!」

案の定長可はキレル

DQNは待つことが大嫌いなのだ

だから、タバコの銘柄間違えるくらいでキレイたりするのである

「あの、えつと、森さんは水野さんと知り合いだっただんですか？仲良さそうですし」

桃香はとりあえず当たり障りのない話でお茶を濁す

「あ!?!んな訳ねえーだろ!!…野郎は

俺を知ってるらしいがな…っーか雑魚を一々覚えておくほど俺は暇じゃねえんだよ
!」

「…いや、水野さんは凄かったですよ…戦の時もなんか

、ここう、将って感じがでてましたし」

桃香は両手を動かし、勝成の雰囲気表現しようとした

「はん、俺からしたら雑魚だ…そもそも将なんだから将って感じが出てなきやおかしい
だろがよ…てかんだその変な動きは?」

「…:…ははは…変な動き…:…あ!そうだ!ご主人様が言っていました、森さんって大きな戦に出てたんですよね!その時のこと今後の為に聞かせてくださいよ!」

桃香は少しショックを受けつつ、真相に近づけそうな話を思いつき、長可に振った

「でけえ戦?…ああ長久手か…つつても長久手の最中に、こつちにいるの間にか来てたんだよなあ」

「……………へーそうですか……………えっと、その、因みにその時の戦の相手ってどんな人だったんですか」

桃香は宛が外れ、苦し紛れに敵の話を聞くことにした

「あん？家康……………あー、んと水野の従兄にあたる奴なんだが……………胡散臭い野郎ってことしか知らねえな……………水野そっくりだ」

「えーじゃあ……………森さんと水野さんは敵同士だったってこと!？」

「あー……………そーなんな……………つつてもそこまで珍しくもねえだろ……………昨日まで敵だった奴が味方になることもあるし、またその逆もしかりだ……………大切な人は今どうだかだろ」

「……………そっか」(もしかしたら、水野さんが森さんを討ち取ったと思っていて、実は森さんは生きていたってことなのかな……………?だとしたら、水野さんにも話を聞いてみて、もし、森さんを狙っているようなら止めなくちゃ!)

桃香がそう決心し、横にいるはずの長可を見るといつの間にか長可の姿は無く、慌てて前を向くと、遠くに歩いていく長可の姿が見えた

「あれ？森さんどこ行くの!？」

「あ!!?本陣もどんだよ!!」

「なら私も一緒に行くからちよつと待っててくださいい!」

そういつて桃香は立ち上がり、尻についた砂を払った

そうして、長可の方に向きを変えると、長可が待つててという言葉が無視して、歩いているのが見え、桃香は走つて長可に追い付き、横に並んだ

「もー待つててくださいいって言つたじゃないですか！」

「知るか！てめえが勝手に言つたんだろが！つーかなに横にいんだよ！どつかいけ！糞が！」

「行くところ一緒なんですからいいじゃないですか！」

「ちっ、勝手にしろ」

「はーい…勝手にしていきますよー」

こうして、長可と桃香は2人並んで本陣に戻つていった

長可と桃香が本陣に戻りだす少し前、勝成は本陣に到着し、本陣幕舎にいた一刀と愛紗と鈴々に話掛けた

「皆様戻りました」

「水野のお兄ちゃんおかえりーなのだ！」

「水野さん、おかえりなさい」

「水野殿おかえりなさい、どこに行かれていたの？」

「いや、森殿と油を売っていたら、桃香殿に怒られてしまいましたね」ニツコリ

「なんと、しつかりしてください水野殿！」

「ははは、面目ない」ニツコリ

そういうと勝成は幕舎に見かけない二人の女性というには幼い少女が2人椅子に座っていることに気づいた

「おや？彼女達は？」

勝成は愛紗に問いかける

「はい、なにやら我らの義勇軍に参加したいというもの達です…私としましては幼い彼女らに戦に出てほしいとは思わないのですが…」

「そうですか……」

そう言うのと勝成は自分の膝を曲げ、その少女の目線に自分の目線を合わせた

「初めまして、私は水野勝成と申します……宜しければ貴殿らの名前を頂戴したいのですが……」ニコツ

すると、ベレー帽のような帽子を被った金髪の少女が答えた

「はわわ……えっと、姓は諸葛、名は亮、字は孔明と申します……よ、よろしくお願ひします……」

続けて魔女のような帽子を被った薄い水色の髪の少女が答える

「あわわ……その、せ、姓はホウ、名は統、字は士元と申します……よ、よろしくおねがいしまちゅ……あう……囁んじやった……」

2人の自己紹介が終わる

「……………へえ」ニヤリ

今まで見たことのないほどの嫌らしい顔をする勝成であった

第14話

「いやいや、こんなに可愛らしい方が軍に入って頂けるのであればそんなに嬉しいことは無いですよ」ニコ

勝成は一瞬の嫌らしい笑みを浮かべるもすぐにいつもの爽やかな笑みに変えて話し出した

「あわわ！そんなこと無いですよ

…それで…あの…それで私達はこちらで働かせて頂けるのでしょうか？」

「そうですね…皆様はいいかと思いますが…ちなみに私は参加に賛成です」

「私は力を貸してくれるならうれしいです」

「俺も桃香と同意見です」

「…ご主人様…桃香様…私はやはり反対です！このような子どもを危険な目に合わせる

訳には参りませぬ！」

「そうなのだ！子どもが出る幕じゃないのだ！」

一刀と桃香は孔明の義勇軍参加に賛成したが愛紗と鈴々は難色を示した

「どーでもいいからお前らに任すわ…」

そして、長可は決定に従う立場を取った

「では、多数決で孔明殿と土元殿の義勇軍参加を認めるということで…よろしいですか？」

「はい！それで良いと思います！

愛紗ちゃんと鈴々ちゃんもいいよね？」

「……分かりました」

「むー分かったのだ」

勝成の提案に桃香は賛成し、愛紗と鈴々も渋々提案を飲んだ

「では私達の真名を受け取って下さい…私の真名は朱里と言います」

「私は雛里です…皆さんよろしくお願いします」

そうして、桃香達も一通り真名の交換もすんだところで勝成が言い出した

「では、早速ですが御二人に知恵をお借りしたい…我らには公孫賛殿から武功の一部として500の捕虜の処置を任されていますが、我らの義勇軍の兵は公孫賛殿から一時的に借りた500のみです

公孫賛殿の本拠に帰還すれば、全員指揮下を離れることとなります

が…捕虜を我らの兵として迎え入れるべきだと思いますか？」

「…何故そんなに捕虜がいるのですか？」

「森殿が2000の敵軍に一人で突っ込んで大将を討ち取ったからですよ」

勝成が2人の疑問について答えた

「はわわ…す、凄い方ですね」

「あれ？森さん？義勇軍はどうしたの？」ヒソヒソ

勝成と2人の話には義勇軍の兵がいないことになっているのに気づいた桃香は、義勇軍を指揮していた長可に小声で話を聞いた

「ああ…なんでも戦の後、帰りたいつー奴等が多く出てな…めんどくせえから全員（土に）還してやったんだよ」

「そっか…全員（家に）帰しちゃったか…しようがないよね…皆家族とか大切な人がいるだろうし…むしろここまで付き合ってくれた事に感謝しなきゃ！でも、それならさつき言ってくればいいのに…」

「しようがねえだろ…言うの忘れたんだよそれに連中をこれ以上連れてつても、肉の壁にしかなんねえーよ」

その壁にしようとした張本人がほざいているころ、孔明達は捕虜の扱いについて、答えを出した

「…そうですね。現状を考えると調練等をして、それに耐え抜いた捕虜を部下に加える

のが最善だと思います」

「…私も朱里ちゃんと同じ意見です…ただ上の立場にいた捕虜は反乱防止のために処罰するべきかと思えます」

2人は現在の劉備軍の状況から最善であると思う策を提案した

「あ!!?ぎけんじゃねーぞ!!捕虜は全員処刑だろが!!ボケが!!」

「私も全員処刑がよろしいかと思えます!後でいくらでも募兵は募れますし、なにより一度刃を交えた相手に易々と背中を預けたくありません!」

朱里達の策に長可はもちろん、以外にも愛紗も反対を示した

「……あわわ、た、確かに皆さんの意見ももつともだと思えます…で、でもここで兵を獲得しないと我々の私兵が居なくなってしまう…即ち義勇軍としての体裁すら取れないと民衆から思われる可能性があり、今後の募兵に影響が出るかも知れません」

「それに我々は一応義勇軍ですから兵がいないと、公孫賛殿の家臣達から白い目で見られてしますし…」

雛里の反論に朱里は付け加える

「別にそんなに多くなくとも良いんです…精々100程度いるだけで…その他の賊の処置は森殿の独断で結構です…これでどうでしょう桃香様、ご主人様」

朱里は2人に同意を求めた

「そうだね…元々捕虜は森さんが捕らえてくれたんだからそれで良いと思う」

「私もご主人様と同意見だよ…森さんの武功に報いるものも今の私達には無いし…」

「…ヒヤハ…いいぜそれで…もちろん調練は俺が担当すんだよな？」

長可は朱里の提案を嬉しそうに飲んだ

「…私としてはやはり賊を部下にするなど心情的に納得できません！」

愛紗は朱里の提案に異を唱える

「うるせーな！俺の武功だろうが!!俺が決めて何が悪いんだよ!!嫌ならためえが敵の大將殺ればよかったただけだろーがよ!!口だけ達者か!?ああん!!!」

「くっ…しかし…」

「まあまあ、愛紗ちゃんも森さんも落ち着いて…」

愛紗が言い返そうとしたとき、桃香が割って入り、2人に言った

「愛紗ちゃん…黄巾党の人達だつて好きで町を襲った訳じゃない人もいるんだよ…お腹が空いて、でも食べ物がないにもなくて、そんな人達を好きで黄巾党に入った人達と一括りにして処刑なんて酷いことだと思わない？」

「桃香様…」

「そして、森さん！言い過ぎです！確かに森さんが敵の大將を討ち取ってくれたおかげで勝てましたけど、その後黄巾党を包囲したのは愛紗ちゃん達ですよ！」

「チツ…ウツセーナ」

「森殿、桃香様の言う通り少し視野が狭くなっております…申し訳ございません！」

愛紗は長可と桃香に謝罪した

「あ…っーかそろそろ帰っていんじゃないね？」

長可は外の様子をチラリと見て桃香達に言った

「そうですね…戦後処理も終わってる見たいですし…では、私が本陣に帰還を進言してきますよ」

「俺も行くわ…おもしろー事してつかもしんねえしな…ヒヤハハ」

そう言ううと勝成と長可は幕舎を出て、公孫賛のいる本陣に向かった

今回捕まえた捕虜達の中には討ち取った波才の副官を勤めていた者もおり、公孫贄はその者を拷問にかけていたが、一向に口を割る気配がなく、時間ばかりが過ぎていた。「…はあ…脅しても、痛め付けても口を割らないか…いつそのこと本拠に戻ってから本格的にやっつたほうがいいのか？」

そうして悩んでいると本陣の幕舎の外から声が聞こえた

「失礼します！ 県令様！ 義勇軍の水野殿と森殿がお目通りを願っておりますがいかがいたしますか？」

「そうか…通していいぞ…」

「はっ！かしこまりました！」

その後しばらくすると勝成と長可が幕舎に入ってきた

「失礼します…公孫贄殿…戦後処理も終わりかけておりますし、そろそろ帰還をしてもよろしいのではと思ひ参りました」

「おお、そうか…はあ、すまないがもう少しだけ待つように桃香達に伝えてくれないか…」

「なんかあつたのか？」

長可はため息をつき、悩んだ様子の公孫贄に対して質問をした

「ああ…捕虜の中にいい情報を持つてそんな奴がいてな…そいつを今拷問して聞き出そ

うとしているのだが知らぬの一点張りだな本拠に帰ってからにするか迷っていたところだ」

「ほう…では私に任せてくれませんか？」ニヤ

勝成はにやけ面で公孫賛に提案をした

「ん？……そうだな…よし！水野！やってみてくれるかその間に私達は帰り支度を済ましておく！」

「では、そのように…森殿、捕虜を2、3人ほどと野ネズミを一匹捕まえてきてもらってよろしいですか？…物凄く面白い事に使いますので」ニヤニヤ

「は、俺に使えばなし頼むんだ

面白くなかったらぶっ殺す！」

そう言うのと長可は本陣幕舎を出ていった

「さてと次は…公孫賛殿鉄でできた円形のものとかございませんか？」

勝成は長可が出ていくのを見届けると公孫賛に対して質問をした

「あー、少し待っている」

そう言うのと公孫賛は座っていた本陣中央の椅子から立ち上がり、幕舎から出ていったと思つたら、すぐに戻ってきた

「これでいいのか？」

そう言つて差し出したのは調理用と思われる鉄でできた鍋であつた

「ええ…充分ですしかし、こちら使用してよろしいのですか？」

「いいぞ別に、取っ手の部分が壊れてしまったやつだからな」

公孫賛の言う通り、その鍋には、取っ手が片方しかついていなかった
「では遠慮なく使用させて頂きます」

そうして、鉄の鍋を受け取り、長可を待つこと約四半刻

長可が3〜4 cmほどのネズミと捕虜2名を連れて本陣に戻つてきた

「では、その捕虜のいる場所をお教えくださいますか」

「ああ、おい！誰か！」

そう言つと公孫賛の衛兵が幕舎の中に入つてきた

「すまないが、この者達を拷問の場所まで案内してくれ」

「はっ！かしこまりました！では、こちらでございませう」

そのまま衛兵に付いていくと、周りよりも、少々小さめな幕舎が現れた

「どうぞお入りください」

衛兵が幕を上げ、中に入るとそこは薄暗く、松明を焚いており、中央には、鞭の後が痛々しくあり、膝の上に石を詰まれてる男がいた

その男は勝成達を鋭い眼光で睨む

と、その横にいた捕虜達に目をやった

「お前ら……」

「副官殿……」

「……では、今からする事についての話をしましょう」ニコツ

勝成は副官に対して嬉々として話し出した

「まず、身動きが取れないようにしっかりと仰向けで拘束します……その後、腹の上にネズミを放ち、この鍋で閉じ込めます

そして、この鍋を固定したのち鍋の上を松明の火で熱します……すると、ネズミはその熱から逃れようと腹を食い破るそうです……食い破られた者は少しずつ食われながら死に至るといわけです……クフフフフ、愉しそうですね……」ニヤリ

「……そ、その程度の脅しに屈すると思っただか!!そもそも俺が死ねば情報も得られんぞ!!」

副官は勝成に怯えつつも、脅しと思い、自分自身を奮い立たせるためにも大声で怒鳴った

「……誰が貴方にやると言っただんですか? 貴方は自分の部下が苦しんでのたうち回りながら死んでいく様を観るんですよ」ニコツ

「なっ……!!」

副官は絶句した

「ヒヤハハハハハハ!!!! そいつは最高だ!!! 水野!!! 俺に火点かせろ!!!」
「ええ、もちろん…ああ、でも2人目は私にやらせてくださいね!!!」

そう言うのと勝成と長可の2人は捕虜の1人を木の板に仰向けで固定し、腹の上にネズミを乗せ、そのネズミの上に鍋を被せ、固定した

「じゃあ行くぜ!!! どんな風に死ぬのか楽しみだな!!!」

「ま、待て!!!」

長可が松明に手を取り、熱しようとした瞬間、副官は制止の声を上げた

「わかった…わかったから止めてくれ…俺の知っている限りの情報を教えるから…部下にだけは手を出さないでくれ…頼む…!」

「ふ、副官殿…!」

「わかった…では、早速だが…!」

衛兵は黄巾党の軍備や幹部の名等様々な事を副官に質問した

「うむ…以上だな…この事に嘘偽りはないな…」

「ああ…すべて本当の事だ…」

「うむ…ならば…ん?」

衛兵は副官と話している際に肩を叩かれた

振り向くと目の前には勝成が立っていた

「あの…もういいでしょうか…？」

「え…？あ、ああ！はい！もう結構です！ありがとうございます！本当に助かりました！」

衛兵は勝成がもう自分たちの幕舎に戻って良いのかを確認するために話し掛けたのだと思つた…だが、

「森殿!!もういいそうですよ!!」

勝成が、その声をかけると長可は再び松明を手に取り鍋を熱し始めた

「ギャアアアアアアア!!」

「ヒヤハハハハハハハハ!!」

「な…!?お前ら!!!約束が違うぞ!!!」

副官が叫ぶ

それに対して勝成はにこやかに答えた

「衛兵と貴方が勝手に決めた約束に我々を巻き込まないで下さいよ…それに我々がいつ拷問など言いましたか？」

我々は、ただ純粹に貴方達が苦しんで死ぬ姿が観たいんですよ…」ニッコリ

「ひひ…!!」

その後、
当分の間叫び声と笑い声が
辺り周辺に鳴り響いた

第15話

黄巾党の捕虜の拷問と言う名の処刑が終わり、長可と勝成は桃香達の元に戻った

その後、すぐに全軍に帰還命令が出され、公孫賛の居城に帰還した

そして、帰還後すぐに論功行賞が行われ、正式に桃香達が客将として認められ、更に、戦功第一の褒美として、長可の降伏した黄巾党員の処罰の決定権を与えられたことが発表された

その後、桃香達を残した全員が謁見の間から退室した

「ふう…取り敢えずは一段落だな…ありがとう森…それに桃香、お前達が包囲をしてくれたお陰で追撃をする手間が省けた」

「そんな…包囲したのは水野さんのお陰だよ…」

「いえいえ…私は策を申したまで…ご英断されたのは桃香殿ですよ」

（…水野と森…こいつら何者だ…？戦での森の一騎当千の槍働きに水野の用兵術…北郷が戦慣れしている言っていたが戦慣れし過ぎと言ってもいいくらいだ…敵に回ったら厄介だが…）

公孫贄は勝成と長可の戦働きを評価する一方で勝成と長可を警戒強める形になった

「まあ、皆怪我無く無事に帰れて良かったよ……」

「ですな……」

「……まったくだよ……ところで、話は変わるが水野と森……お前ら何者だ？……戦場での働き、とてもその辺の在野の将とは思えんのだが」

公孫贄は意を決したような顔つきで勝成と長可に質問をした

「……そういえば、最初に会ったとき日向がどうか武蔵がどうか言っていましたよね？」

桃香は思い出したような口調で言った

「日向守、武蔵守という我々の住んでいた国の官位です……まあ漢に例えるのなら、太守と言ったところですかね」

「なに!!本当か……ただ者ではないとは思っていたが他国で太守の役職を勤めるほどとはな……しかし、その様な者がなぜ桃香の元にいるんだ？」

「それはですね……我々の国は徳川に天下が統一されまして、平和なのは良かったのですが暇で仕方がなくなりました、他の者にその役職を譲り、流浪の旅に森殿と共に出かけたのです……ねえ森殿」

「まあ……」

その場しのぎの適当な話を作り、勝成は長可に同意を求めた

(…嘘だな…だが、森に関しては救ってくれたのだから敵ではないだろうし、水野も桃香が信頼しているようだから大丈夫か…?)

「そうか…わかった…ところでお前らはこれからどう行動するつもりだ?」

これ以上勝成に対して質問をしても満足のいく答えが帰って来ないと判断した公孫賛は、桃香に話を振った

「取り敢えず兵の訓練が終わったら

各地で黄巾党と義勇軍を再編して戦おうって思っているんだけど…

森さん! 捕虜の訓練ってどのくらいでおわりそう?」

「ああん…まあ、半月もありや、ここにいる雑魚連中よりも強くしてやるよ」

「雑魚なんて言ったら駄目だよ森さん! ごめんね白蓮ちゃん…森さんは照れ屋さんだから」

照れ屋さん…? なるほど今まで理不尽に殺されてきた連中は照れ隠しだったのか(驚愕)

「気にするな桃香! 私も森の憎まれ口には慣れてきたしな!…しかし、半月か…分かったそれまでの間に私に手伝えることがあるなら遠慮なく言ってくれ」

「白蓮ちゃん…ありがとう!!…みんな何か頼み事とかある?」

「でしたら公孫賛さん…募兵の許可と兵糧をお願いします」

現在劉備軍は全てにおいて足りていないが、一番足りてないのが兵力と兵糧であった
そのため、朱里はこれらを要求した

「もちろん分かつている！私の領内であれば、好きなかだけ募兵してくれ！…兵糧についても10000の兵が一月は持つ位はくれてやる！」

「本当ですか!!？」

現在いる捕虜が全員劉備達の兵になったとしても二月は持つ

公孫賛にとつてはかなりの出費となるはずである

それだけの出費を簡単に出すと言われる桃香の仁徳を朱里は改めて感じた

「そんなに貰ったら悪いよ…」

「ははは！遠慮するなといっただろ！どうしても悪いと思うなら出世払いで良いぞ！」

「うん！絶対に白蓮ちゃんに恩返しするからね！」

「はは、期待せずに待つてるよ！」

「もう！白蓮ちゃん！」

ハハハハハハ……

こうして桃香と公孫賛はこうして旧友を深めた

そして、幾日が経ち、長可は、山奥で黄巾党の捕虜達を訓練していた

訓練はかなりハードであるが、死人も出ず、捕虜達も必死に食らいつき、何とか脱走するものも出ず、辛いが充実した日々を過ごしていた

「…よし！今日はここまでだ！帰えんぞ!!」

ヨッシャー！ ヤットオワッター！

長可が訓練の終わりを告げると捕虜は喜びを露にして、素早く帰り仕度を済ませた
長可達がいる山は、公孫賛の拠点までかなりの距離がある

なので、山の麓にある村に協力を仰ぎ、何名かを町に住む住人の家に居候させていた
普通なら嫌がるだろうが村には、優しく、面倒見が良い人が多く、嫌がるどころか逆に捕虜達の受け入れたいという人で一杯であった

このような村であるため、捕虜達が町を好きになるのに時間はかからなかった
中には、泊まった家の娘と恋人になるものもいた

日々を暴力で過ごしていた黄巾党の時とは違い、護るための力を捕虜達は確実に付けていった

そうして、捕虜達は半月が経つ頃には協調し、どの様な命令に即応出来る兵に成長していった

「…おし!!おめえらこれで訓練は終いだ!!!公孫贄のやろーの拠点に戻んぞー!」

「二!はい!ありがとうございます!」

そして、訓練が終わると山から下り世話になった村の前までくると長可は全軍を停止させた

兵達はこれを村に最後別れのに挨拶をさせてもらえると考えた

だが…

「お前らに試験を出してやる!」

そう言うのと長可は槍を村に向け邪悪な笑みで口にした

「この村から兵糧強奪していくぞ!!」

—兵達に動揺が走った

「……は、はは……じ、冗談ですよね…」

「あああん!!冗談だと思おうか!!」

「こ、公孫贄殿の領地に攻撃するのは下策ではないですか!!」

「ああん!!んなもんバレなきや良いだけの話だろーがよ!!てきとーに山賊の仕業にでも

しとけばいいんだしな!!」

「我々は義勇軍です！理由もなく何の罪も無い村に攻撃を加える訳には行かないでしょう!!」

「理由だ!!?さつきいったらだろが兵糧奪うんだよ！

つーかおめえらの生殺与奪は俺にあんだぞ!!!分かったらとつとどぶち殺しにいくぞ

!!」

「ぐっ……」

この言葉で兵達はようやく静かになり、皆体を震えさせながら頷いた

今日で、調練をしに来ている義勇軍の人達は拠点に戻るといふことなので村では総出

で見送りの準備に勤しんでいた

夜になる前には見送りの準備も終わり、兵達が村に戻ってくるのを待つだけの状態であった

そして、夜になり、長可を先頭に村に戻ってきたのを村の村長はいの一番に駆け寄った

「森殿！今日でお帰りになられるとのこと！我等一同で細やかではありますが宴の準備をしました！」

「宴か…悪くねえな！」

「ええ!!ご用意出来るものならば何でもおっしやつて下され！」

「何でも…か…ならひとつだけ頼もうかな」

そう言うと長可は村長の肩に左手を乗せた

「はい…なんで…(ぎ)…(ぎ)…」

グシユ……………!

肉が抉れる音が周囲に響き渡った

音のなった場所には背中から槍が突き刺さっている村長がおり、槍を辿っていくと村長をさして、悪魔のような笑みを浮かべる長可の姿があった

「…な、な…ぜ……………で…」

ザシユ……………!!

村長の首が空中高く飛び、村人達の目の前に落ちた

「う、うわああああ!!!!」

それを見た村人達は叫びながら蜘蛛の子を散らすように逃げ出した

「よーし!!おめえら!楽しい宴の始まりだぜえ!!」

長可は逃げ惑う村人達を見て、愛槍である人間無骨を振り回して、嬉しそうに兵達に告げた

村娘である綾は逃げながらある人物を探していた

半年の間に恋人となった兵士である劉辟という人物である

周りでは昨日まで家族のように一緒に暮らしていた兵達が村人達を殺し、犯していくそんな中でも自分が愛した劉辟だけは助けると信じていた

「はあはあはあ……………」

しかし、逃げるにも体力と精神は限界に達しており、それが隠れて、劉辟が来るのを

待つという選択肢を選ばせた

小屋の中で息を潜めながら劉辟と初めて会った時のことを思い返していた

半年前：兵達が家に来ると決まったとき、綾だけは家族の中で反対をしていた

しかし、両親と妹の賛成で兵達を迎えることになったが他の家には5く6人泊まつているなか反対している綾がいるということ、一人だけということ、話し合いは一先ず終わった

その一人が劉辟であった

劉辟が来る当日、どうしても元黄巾党というのが信用できず、どこまで本性を隠せるか劉辟にわざとらしく嫌味を言ったり、両親と妹の視角で小突いたりといった嫌がらせをした

しかし、劉辟はどんな嫌がらせを受けても文句一つ言わず、調練で疲れている中、真面目に家事や雑用を手伝っていた

それが綾にとつては家族が取られていっている様に思えた

それで更に嫌がらせをしてやろうと毒草を手に入れるため山に登った

山に登った綾だが、崖に生えていた毒草を採ろうとした際に、足を踏み外し、崖から

転落しそうになるのを腕だけで崖の岩にしがみつき、大声で助けを呼んだ

しかし、何の反応もなく、次第に

腕の力も弱まっっていく

いよいよ、死を覚悟し、岩から手が離れた瞬間、何か綾の手を掴んだ

上を見るとあれだけ嫌がらせをした劉辟が今までに見たことの無いほど必死の形相で綾の手を掴んでいた

そして、一気に綾を腕一本で引き上げた

その後、二人は暫し放心状態になったが今までの罪悪感にかられた綾の方からこれまでの嫌がらせのこの謝罪と家族が取られるかもと思つたこと等を正直に話した

すると、劉辟は自分の生い立ちについて話してくれた

親に捨てられ孤児として、愛情というものを知らずに育つたこと

黄巾党に入らなければ餓死していたこと

今見ている家族がとても眩しく見えて、自分の犯した罪に押し潰されそうになること

綾には家族という居場所があつたが、劉辟には元々それすら無いという事を知り、自分が劉辟の居場所になつてあげたいと思うようになっていった

そうして二人は恋人同士になつていった

……ヤ……綾……

遠くで聞こえる声にいつしか寝てしまっていた綾は目を覚ました

「綾ー!!!どこだー!!!」

紛れもない劉辟の声に綾は安堵し

、隠れていた小屋の扉を開ける

「ここよーりゆうへ……」

扉を開けると目の前には、血だらけで、綾の両親と妹の首、それに他何名かの首を腰にぶら下げた劉辟の姿があった

「あー…いたー…そんなところに隠れてたのかよー!誰かに殺られたのかと思っただじやないかー!」

普段と変わらない口調で綾に近づいてくる劉辟に綾は硬直してしまふ

「…な、なんでよお……」

涙を流しながら、絞り出すように綾は劉辟に聞いた

「ん?なんでかかって?いやさー…うちの大將がね!せっかく宴なんだから余興をやるうってことになってさ…今まで世話になった人達の首を一番多く持っていった奴をこ

の隊の副官にしてくれるってことになったんだ！分かったかな？」

綾は劉辟が何を言っているのか分からなかった

というより分かりたくなかった

「そんじゃ！早速で悪いけど死んでくれ！綾でたぶん最後だからさ！」

そう言う劉辟は手に持っていた

剣を構える

「自分がやった罪に押し潰されそうだって……」

「うん！押し潰されそうだよ！でも殺っちゃた事は仕方ないじゃないか！反省はしても後悔はしないように人生は生きないとさ！」

「い……いや……助けてえ……」

「だーめ！我が儘言うなよな！妹ちゃんだってほら！こんな姿になったんだからさ！
ねえ妹ちゃん！」

そう言う劉辟は腰に掛けていた妹の首を綾に近づけ、声を高くして、妹に似せた口調で言った

「そうだよー！お姉ちゃんも一緒に首だけになろうよー！体が軽くなるよー！ほら」

そう言う劉辟は両親と妹の首を手に持ちお手玉の様にあそびだした

「……あ……ああ……あああああああああ！！！！」

両親と妹の首を遊ばれた綾は壊れたように劉辟に突っ込んだ

ドン…!!

ドシユ………!

「いつてー!いきなり突っ込んでくんやよ!びっくりすんじやん!」

綾は劉辟に突っ込み押し倒したが剣を首に突き刺された

血を吹き出し絶命しているであろう綾に劉辟は近づき、首を刈り取ると両手で綾の目を見た

「綾……この半年間楽しかったよ!君の事は忘れないよ……」

そう言うと劉辟は綾の首を大事に抱えて立ち上がり長可の元へと帰っていった

「んじや!結果発表だ!こんなかで一番多く首を持ってきたのは………!」

村の全滅を確認した長可は、余興の結果を皆を集めてやりだした

「劉辟!!おめえだ!!!」

「やったー!!!」

イイナー……オメデトー

副官に決まった劉辟に皆祝いの言葉を告げた

「つーかおめえら最初ヒビってんのかと思つたぜ!!肩まで震えさせやがつて!!」

「なにいつてるんつすか大将!俺ら元々黄巾党ですぜ!体震えてたのは嬉しくてつすよ
!・なあ皆!」

「あたりめーでしょ!元黄巾党を舐めんでくませえ!」

「ヒヤハハハハ!!!悪りいな!!おめえらが予想以上に優秀だったからよ!!……じゃあ奪える
もん奪い取つたら火い着けて帰んぞ!」

「「はい!!!大将!!!」」

こうして長可は自分の手駒となる兵を500手に入れた

鮭様奮闘記 第2章 鮭がために俺は殺る

やあ（・ω・）ノ

久しぶり！義光だよ！

なんでも最近こーきんとーってやつが流行っているらしいね！

おじさん流行には敏感なんだ！

こーきんとーってのがなんなのかはよくわからないけどね！

お菓子かな？金平糖となんか似てるしね！

大人びていても華琳ちゃんもまだまだ子供だね！

そう言えば義も金平糖は大好きで、贈ってあげるといつも感謝の書状が届いたものだよ！

本当に良い子だよ！あの穀潰しさえ生まれてなければ直ぐにでも伊達を滅ぼして、山形城に連れ戻したのに！

ちなみにこーきんとーのことを聞いた蘆名とうちの嫁の実家等を滅ぼしただけで奥州の覇者とかほざく独眼竜（失笑）はなんか考えていたよ！

バカの癖になにを考える事があるんだろうね？

考える頭があるなら普通は私に謝るのが一番に思い付くとおもうんだけどね！

あ！普通なら自分の父親撃ち殺さないか！

そんなことを政宗に言ったら「叔父上に似たのでね」だつてさ！

うちは強制的に隠居させたただけなのになんて嫌味な奴なんだろうね！

それで喧嘩になつた所を華琳ちゃんに見つかつて仲裁してくれたよ！やっぱり良い

子だね！

その後、華琳ちゃんから割り振られた部屋にいたら政宗が来て「叔父上は三国志も知らないのか？」つて聞かれたよ！

そんなの知つてるに決まつてるじゃないか！バカにするのもいい加減にしてほしいね！

りゅーびとかかんうとかの話だろつて言ったら「知つててそれか…」と呆れられたよ！

呆れるのはこつちだよ！まつたく！

そしたら政宗のバカがここは三国志の世界かもしれないとか真面目な顔でいいだしたんだ！

ついに頭がイカれたんだね！

……あ！元々か！そんな過去の世界に戻るなら義が嫁ぐ前に戻つて父上を即追放

して、お前の生まれる可能性を潰してるよ！まったく！

そう言うのと政宗は「では私は長谷堂で上杉の方かもしれないですね」だってさ！

自分は静観決めてこつちが有利になった途端味方に付いた癖になにいつてんだらう
ね？

そんな感じでまた喧嘩を始めたら、今度は秋蘭さんに止められたよ！

何回も年下に喧嘩の仲裁をされて恥ずかしくないのかね？まったく！

そんなこんなで一日が過ぎたよ！

まったく！政宗のせいでもっとも疲れたよ！

やっぱり伊達って糞だね！

おはよういい朝だね！

華琳ちゃんの客将になってから初めての食事だよ！

今日の朝ごはんは皆大好き焼鮭みたいだね！

朝から豪華だね！やっぱり鮭の魅力はあのカリツとした皮と肉厚で上品な脂が乗っている身にあると思うんだ！

煮てもよし焼いてもよし蒸してもよしと三拍子揃った素晴らしい魚それが鮭だよ！

神はなんでこんなにも完璧な食材を作ってしまったんだろうね…あーもうしゃぶりつきたいけどここで焦ってはいけないんだ！

衝動を抑えつつ、皮から食べるか身から食べるかそれとも両方味わうかを決めることが大切なんだ！

よし！今日は久しぶりの鮭だから基本に忠実に身から食べていくか！

さあ！楽しませてもらうおうじやないか！鮭による刹那の饗宴を!!!

という風に気分を高めつつ鮭を堪能しようとしたら、秋蘭さんと春蘭さんが食堂に入ってきて、将の緊急集合だから急いで行くぞと連れていかれたよ…

鮭だけ食べさせてって懇願したのに聞き入れてもらえないかった（・ω・）
でもなんの議題だろうと聞いてみたらこーきんとーがこつちでも
動きだしたらしい

……………なにそれ超見たい！こつちでもつてことは他でも動いているんだね！

そんなわけで、動きだしたお菓子を見るために軍儀場にきたよ！

動きだすなんてどんな菓子なんだろう？

楽しみだな＋(0°・▽・)＋ ワクテカ ＋
ちなみに政宗は、兵糧庫で背の小さい金髪で猫の被り物をつけた女の子とイチャついてたよ！

手を出すのが2つの意味ではやいね！

や伊糞

………へえー…ほおー…ふーん

こーきんとーってただの一揆なんだ…

知らなかったな…教えてくれればそんなに急がなかったのにな…！

鮭も我慢したのに…！

鮭も我慢したのに…！

大事な事なので二回言ったよ！

ここまで腹が立ったのは久しぶりだよ！こーきんとーめ！

名前が紛らわしいんだよ！ばーか！！

こうなったらこーきんとー滅ぼしてやる！食べ物への恨みは恐ろしいって事を身をもって体験させてやるよ！ちくしょーめ！

まったくなんなのよ！

昨日のあの男達は！

曹操様に対して敬いもせずに眼帯の方は曹操様の真名を呼び捨てにするし、デカイ方は曹操様を完全に子供扱いしているじゃないの！

所詮は男ね！脳味噌の変わりに精子が詰まってるような連中に曹操様の偉大ななんて分かるはずがないわよ！

いつか私が曹操様の軍師となってあの男どもを追い出してやるんだから！

そう息巻いていると黄巾党が隣の県で動きだして、その県令が逃げ出したという報告があったわ！

ククク…これは願ってもいない好機ね…ここで功をあげれば曹操様の軍師となつて寵愛を受けることが出来るわ!

私の今の仕事は兵糧の管理…それを利用して曹操様に急接近するわ!
待つて下さいませ!!曹操様!!!

そうして、計画を実行していると後ろから声を掛けられたわ…あの眼帯男に…!

聞こえない振りをして、立ち去ろうとすると首根っこを捕まれて、上に持ち上げられたわ!
たわ!

放しなさいよ!変態!つて言うど持ち上げた状態から放すから、尻餅ついたわ!許さないんだから!曹操様の軍師になった暁には、こいつらを絶対に追放してやる!

眼帯男を睨み付けて、そう考えていた私は、冷たく事務的に話を聞いてみた

曹操様の命令を伝えに来たつて…それを早く言いなさいよ!どんくさいわね!まったくこれだから男は…

そう嫌味を言つて、元々作つてあつた見積書を渡したら、少なすぎると言い出したわ!

私が曹操様の軍師になるための計画なんだから当たり前前じゃない!

それを「兵糧足らねーよ…脳味噌まで小さいのか?」と言つてきたわ!

曹操様に気に入られてるからって調子に乗ってんじやないわよ！

うるさいわね！黙って持つていきなさいよ！と怒って、無理矢理曹操様の元に行かせたわ！

その後すぐに曹操様に呼び出されて、私の計画通りに今回の戦で軍師として参加することが出来た！

さすが私ね：後は低俗な黄巾党を一掃すればいいだけだと思っていたわ：

何が「俺ならその半分で相手潰せるぜ：そのチビには無理だろうけどな」よ！そんなこと出来るわけないじゃない！それにあんただってチビじゃない！！

曹操様はでしやばりな眼帯男の言に興味を持たれるし最悪よ！

しかし、やはり曹操様は私を試するのが優先だとおっしゃってくださった：本当に素晴らしい御仁だわ！

まったく、糞眼帯の無駄な時間を使っただけの与太話に付き合ってる暇はないのよ！まあ暇があったとしても聞く気はないけど

そして、曹操様の軍師として出立して少し経った後、前線の兵が騒いでいたわ
何でも黄巾党から村を守っていた少女が私達にも攻撃を加えてきたみたいよ
何をやっているのよ！あの無能どもは！そのくらい簡単に捕らえられないなんて曹
操軍の恥も良いところよ！

あの脳筋女とデカブツが捕らえたみたいだけど子供相手にどれだけ時間を割いてい
るのよ！

その子供でも曹操様の名を知ると抵抗がなくなり、軍に加わりたいと言ってきたわ！
さすがは曹操様ね！隣の町にまで善政を敷いている事が知れ渡っているなんて！
一人が増えたくらいで私の策は揺るがないわ！

そんなわけで、許緒も加わり、攻略の為の軍儀が始まったわ！

荀イクの知力が我が霸道に必要かどうかを見極めるために隣の県にまで兵を進めたのだけれど：やはり軍師が加わった為か今までよりも遥かに行軍の速さが違っているわ

そして、軍儀が始まり荀イクが策を披露したわ：フッフ私を囿に使って砦を攻めるなんて大胆で面白い子ね：嫌いじゃないわ

案の定春蘭と秋蘭と義光が反対を示したわ

しかし、政宗だけが賛成するなんてね：荀イクがかなり嫌っていたから反対するものだと思っていたわ

理由を聞いたなら「悪くない策だからだよ：まあ、俺はもつと上手い策が思い付いてるけどな：試してるから言わなくていいんだよなそーもーとくどおーの：！」だそうよ
完全に根にもってるわね：

春蘭と秋蘭が私を説得しようとしたけど「危険な事がないようにするのがお前らの仕事だろ：職務怠慢を人の策のせいにするなよ」という発言で春蘭は怒り狂うし、秋蘭も冷静だけど怒っているわね

義光に関してはそれもそうかと賛成に変わったわ：相変わらず、政宗関連以外は素直ね

私は春蘭と秋蘭をなだめて、この程度で死ぬ器なら元々霸道なんて不可能よ：と伝えるとしぶしぶ2人とも承諾してくれたようね

春蘭と秋蘭が砦を攻める部隊を率いて、義光と許緒は私の護衛をして、政宗は荀イクの補佐をさせたわ

そして、突撃の銅鑼を鳴らすと黄巾党がほぼ全軍で砦から突撃してきた

まさか黄巾党が自分たちの銅鑼がなっているのかわからないほど練度が低いとは思ってもみなかったわ：

しかし、攻めてくる黄巾党軍は想像していたよりも多く、此方が劣勢になってしまったわ：

そんなとき義光が「よし！敵の勢いもすごいし、鮭のかた：敵の大将の首取ってくるよ！華琳ちゃんは荀イクちゃんと一緒にあのバカ監視しといてね！」と言って馬に跨がり鉄の指揮棒一つもって一人で敵に向かっていった

まあ、春蘭の一撃を受け止めるほどの実力者なら問題ないでしょう

：しかし、いつも温厚で争い事を好まない義光にしては積極的ね：

許緒の件で黄巾党討伐へのやる気が出たのかしら？

でも、政宗と義光はどうしてあそこまで仲が悪いのよ：仮にも甥と叔父の関係でしょう

今はまだ良いけどその内仲を取り持たないといけないわね

その前に2人が何故仲違いをしているのか知らなければならぬわ

この戦が終わったら聞いてみようかしら

そんなことを考えていると前方から「鮭の仇とつたぞー!! あ！間違えた！敵将討ち取ったぞー!!」という声が戦場に響いた……………鮭？

……………はあ、義光が私の覇道のために武勇を積極的に使ってくれているようになったと思っただけど勘違いのようね：フッフ：帰ったら覚えていなさいよ……！

この勝鬨により、黄巾党軍は皆に逃げようとするもすでに春蘭と秋蘭が制圧しており、挟まれた黄巾党の兵達は逃げだした

その後30人程を捕虜した。これらをどうするのかを荀イクに聞いてみると全員この場で処刑するべきと言ったわ

私もそれで良いと思っただけど政宗が「せつかく黄巾党を滅すための毒が入ったんだ……

無駄にすんのはその髪型だけにしとけ」と言ってきたわ

相変わらず一言多いわね…でも、これ以上政宗をすねさせるのも好ましくないため、案を聞いてみたわ

まずは、情報売れば解放すると捕虜達に言う

そして、一人ずつ話を聞いていって情報を売った奴は殺し、情報を売らなかつた奴等を素晴らしい忠義だと褒め称えて、お前だけ特別だと路銀も渡して解放してやる

これで情報を得ることができるとし、疑心暗鬼を生ませることもできる

何故なら自分以外の生き残った兵は裏切り者になるわけだ。信用できない。忠義のある者達だ。それを上司に相談するだろう。

同じ内容の相談を何個も受けたらどう思うか。

そんなことで捕虜を放すなんて都合が良すぎる。ましてや殺されている捕虜もいるんだ。

助かった連中は全員裏切って情報を渡して、内部を混乱させようとしてるのではと考える

兵達は、相談をしたのになにも動こうとしない上司に不満が生まれてくる

兵達は、何故動こうとしないのか考えるだろう。そしてそれは簡単かつ最初に思い付く。上司が裏切っているんじゃないのかと。

これで疑心暗鬼に囚われて気づいたときには敵は壊滅状態、手遅れだ
これが政宗が語った案であった。

……どうやら政宗を見誤っていたようね。これは、知略と言うよりも謀略の類いね。
私が政宗に感心していると義光は「流石！伊達は性格が最低だね！……でも足りない
よ！情報を売った奴を一人くらい解放しないと完全には騙せないよ！」といったもの明る
い口調であった

それ対して政宗は、「流石は叔父上……人を騙すことに関しては長けていらっしやる」と
いつもの嫌味で返したわ

義光は武に長けているみたいだし、普段の態度からそこまで知略に長けていないと
思っていたけどその認識を改める必要が有るわね

そして、政宗と義光の案を採用して、軍を帰還させた

しかし、途中で兵糧が尽きてしまったわ

荀イクは私に首を刈られるのを覚悟をしたみたいだけど優秀なこの些細な過ちで殺
すほど愚か者ではないわ

ただ、私以外を軽く見るところがあるから少し脅かした後、真名を授けた……フフフこ
の失敗は閏できつちりと支払ってもらうもの……ただ政宗と義光のことはやはり嫌って
いるみたいで真名を授けようとはしなかったわ

まあ、今回の遠征で実力は認めあっているみたいだし時が解決してくれるでしょう
それよりも政宗と義光の仲の悪さだけど帰る途中に政宗と義光の双方に単刀直入に
聞いてみたわ

政宗がいうには「俺の邪魔ばかりする迷惑な隣人」といった感じで義光は「平和的に
解決しようとする」と邪魔してくる嫌な隣人」という感じであった

2人とも親戚であるということを感じておると口を揃えて言っていたわ

まあ、お互いに面と向かって嫌味を言い合える相手なんてむしろ仲が良いのかしら
そう考えると政宗の案の中で言っていた疑心暗鬼になることが絶対じゃないわけだし
ある意味一番信頼しあっているのはあの2人かもしれないわね…本人たちが自覚し
ているかどうかは別として…